

宗 像
半田古墳群 I

(福岡県宗像市所在古墳群の調査)

宗像市文化財調査報告書第6集

1983

宗像市教育委員会

序 文

半田古墳群は昭和54年に宅地開発に伴う事前協議が行われ昭和56年12月に至って発掘調査にかかり本年調査報告書の刊行に至ることになりました。

今回の文化財事業においては宗像市の体制が不十分であるがために福岡県教育委員会の酒井仁夫主任技師をはじめとする方々には大変なご努力を強いてしまい、ここに感謝の念を現わすとともに当市文化財行政の対応の遅れを強く反省する次第です。調査において出土した多くの文化遺産は十分な管理保存を行い将来建設される資料館において展示公開活用し、祖先の残した歴史的教材を現代に活かし、さらに子孫に継承してゆく所存であります。

最後に発掘調査において内外の方々の参加、ご協力に厚く御礼申し上げます。

昭和58年 3 月31 日

宗像市教育委員会

教育長 竹 原 瑛

例 言

1. この報告書は宗像市大字土穴における民間宅地開発事業に先んじて実施した発掘調査の結果を記録している。
2. 調査はハザマ地所株式会社の委託を受けて、昭和56年度には発掘事業を、昭和57年度には整理及び報告書刊行事業を宗像市教育委員会が実施した。
3. 調査は福岡県教育委員会の援助を受けた。
4. 本報告書に掲載した写真のうち遺跡・遺構は各調査担当者が、遺物は九州歴史資料館の石丸洋氏が撮影した。
5. 遺物の実測は酒井と須山富子氏が、浄書は豊福弥生氏があたった。
6. 本書の執筆と編集は酒井が担当した。

本文目次

I はじめに	I
II 位置と環境	3
III 古墳群の調査	3
1 A群の調査	3
2 B群の調査	6
3 C群の調査	28
4 D群の調査	39
IV おわりに	43

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)	2
第2図 半田古墳群地形実測図 (1/1,000)	折込み
第3図 A-1号墳々丘実測図 (1/200)	4
第4図 A-1号墳石室実測図 (1/60)	5
第5図 B-1号墳々丘実測図 (1/200)	6
第6図 B-1・2号墳石室実測図 (1/60)	7
第7図 B-1号墳出土鉄器実測図 (1/2)	8
第8図 B-1号墳出土須恵器実測図① (1/3)	9
第9図 B-1号墳出土須恵器実測図② (1/4)	10
第10図 B-2号墳々丘実測図 (1/200)	11
第11図 B-2・3号墳石室床面遺物出土状況実測図 (1/30)	12
第12図 B-2号墳出土装身具実測図 (1/1)	13
第13図 B-2号墳出土鉄器実測図① (1/2)	14
第14図 B-2号墳出土鉄器実測図② (1/4)	15
第15図 B-2号墳出土須恵器実測図 (1/3)	16

第16図	B-3・4号墳々丘実測図 (1/200)	16
第17図	B-3・4号墳石室実測図 (1/60)	17
第18図	B-3号墳出土装身具実測図 (1/1)	18
第19図	B-3号墳出土鉄器実測図 (1/2)	19
第20図	B-5号墳々丘実測図 (1/200)	24
第21図	B-5号墳石室実測図 (1/60)	25
第22図	B-5号墳出土装身具実測図 (1/1)	26
第23図	B-5号墳出土鉄器実測図 (1/2)	27
第24図	B-5号墳出土須恵器実測図 (1/3)	27
第25図	C-1～3号墳々丘実測図 (1/200)	28
第26図	C-1号墳石室実測図 (1/60)	29
第27図	C-1号墳出土鉄器実測図 (1/1)	30
第28図	C-1号墳出土須恵器実測図① (1/3)	31
第29図	C-1号墳出土須恵器実測図② (1/4)	32
第30図	C-1号墳出土須恵器実測図③ (1/3)	33
第31図	C-1号墳出土須恵器実測図④ (1/6)	34
第32図	C-2・3号墳石室実測図 (1/30)	折込み
第33図	C-4号墳々丘実測図 (1/200)	35
第34図	C-4号墳石室実測図 (1/60)	36
第35図	C-4号墳出土鉄器実測図 (1/2)	37
第36図	C-4号墳出土須恵器実測図 (1/3)	38
第37図	D-1号墳々丘実測図 (1/200)	39
第38図	D-1・2号墳石室実測図 (1/60)	40
第39図	D-1号墳出土鉄器実測図 (1/2)	41
第40図	D-1号墳出土須恵器実測図 (1/3)	41
第41図	D-2号墳々丘実測図 (1/200)	42
第42図	D-2号墳出土鉄器実測図 (1/2)	42

図 版 目 次

- 図版1 半田古墳群遠望航空写真
- 図版2 (1) 航空写真(南東より)
(2) 航空写真(西より)
(3) 航空写真(北より)
- 図版3 (1) A-1号墳全景
(2) A-1号墳石室
- 図版4 (1) B群(西より)
(2) B群(南より)
- 図版5 (1) B-1号墳(発掘前)
(2) B-1号墳全景
(3) B-1号墳石室
- 図版6 (1) B-2号墳全景
(2) B-2号墳玄室床面鉄刀出土状況
- 図版7 (1) B-3号墳全景
(2) B-4号墳全景
(3) B-5号墳全景
- 図版8 (1) C-1号墳全景
(2) C-1号墳石室全景
(3) C-1号墳々丘内遺物出土状況
- 図版9 (1) C-2号墳石室全景
(2) C-3号墳石室全景
(3) C-3号墳石室全景(天井石除去後)
- 図版10 (1) C-4号墳全景
(2) C-4号墳石室全景
- 図版11 (1) D-1号墳玄門部閉塞状況
(2) D-1号墳玄門部(閉塞石除去後)
- 図版12 (1) D-1号墳全景
(2) D-2号墳全景
- 図版13 B1・2号墳出土須恵器

圖版14 C-1号墳出土須恵器・土師器①

圖版15 C-1号墳出土須恵器・土師器②

圖版16 C-4・D-1号墳出土須恵器

表 目 次

第1表	B-2号墳出土玉類計測表	13
第2表	B-3号墳出土玉類計測表	20
第3表	B-5号墳出土玉類計測表	27
第4表	石室計測表	44

I はじめに

昭和54年6月、福寿建設工業株式会社より福岡県環境保全条例に基づく事前協議書が県に対し提出された。宗像市（当時宗像郡宗像町）大字須恵、土穴、平等寺にまたがる約183,000㎡の宅地開発行為であった。総面積中の92%までが山林であり、周辺の遺跡分布状況から推定して、古墳の所在が予測された。

同年中に分布調査、山林伐採後の再調査を実施し、14ヶ所に古墳が散在すると推定され、調査期間及び調査費用について協議し、宗像町教育委員会が調査主体となることで合意した。

同年秋、これらの古墳群は丘陵頂部の尾根線上に立地していたため、伐採後の防火帯設置工事に伴って多くが破壊されたことは残念であった。

昭和56年7月20日、工事施主が種々の理由により福寿建設からハザマ地所株式会社に変更され、同年12月1日から翌57年2月27日まで発掘調査を実施した。また57年度には遺物整理を行い、本書の刊行となった。

調査の関係者は次の通りである。

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	竹 原 瑛
		社会教育課長	牧 田 俊次
庶務会計		社会教育課係長	竹 村 功
		同 主事	北 野 隆文・立 石 実
		同 主事	原 俊一
調査担当	福岡県教育委員会	文化課主任技師	酒 井 仁夫・副島 邦弘
		同	井 上 裕弘・川 述 昭人
		同	木 下 修・伊 崎 俊秋

なお、間組現地事務所の方々には物心両面にわたる種々の援助を賜わった。記して謝意を表します。

発掘調査参加者

宮田寿喜・西川慎一郎・梶谷清助・船越鉄也・清家庄市・田辺和男・香月勇・井上光次・石田正年・富野三義・石田嘉代子・桜井順美・倉田千代香・花田沢江・梶谷久子・井上八重子・梶谷タツエ・森タケ子・法泉順子・井上二三子・林和子・越智美知子・梶谷友代・麻生千賀子

参加学生

赤司善彦（明治大学）・斎藤勝明・前田修・横野亮司・荒川理・麻生淳之（福岡大学）・宮内智久（福岡教育大学）



第1図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)

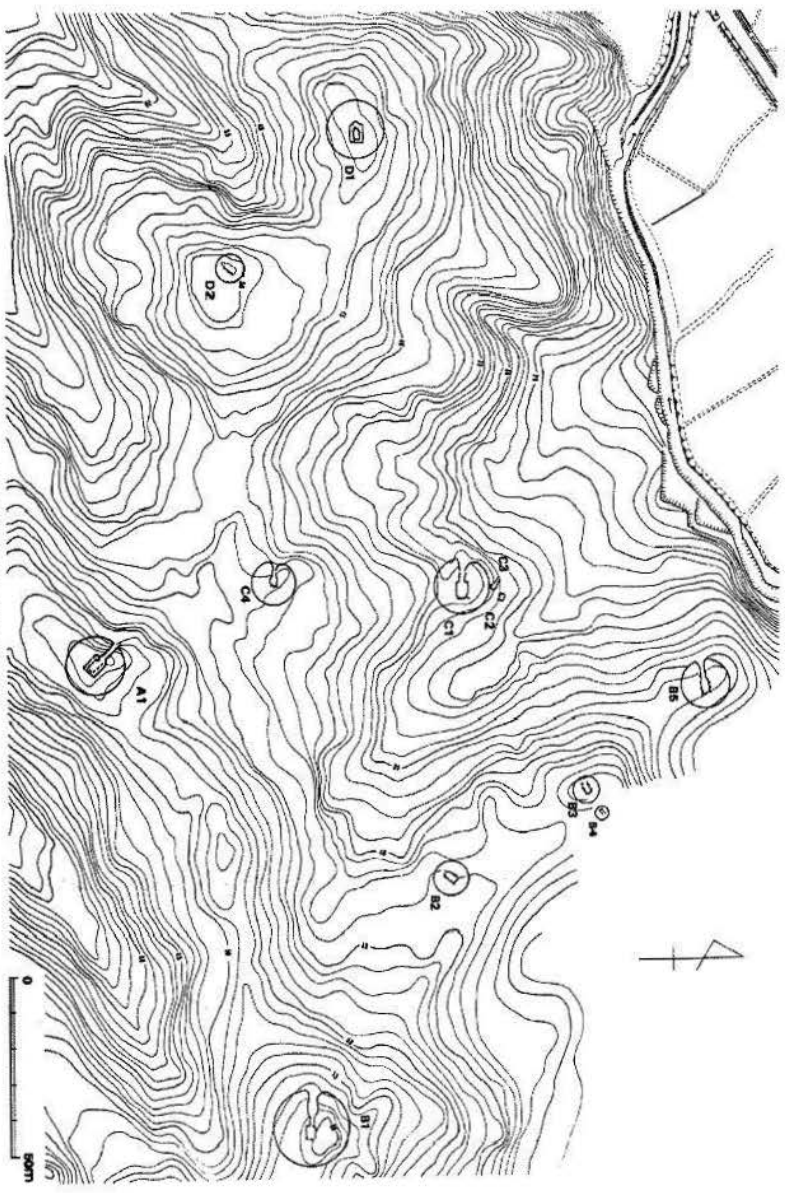


圖 2-1 南陽古戰場地形示意圖 (1/1,000)

II 位置と環境

宗像市内に所在する古墳群の発掘調査は昭和41年の東郷古墳群の調査が嚆矢であり、その後三郎丸古墳群、城ヶ谷古墳群、稲元古墳群、中松元古墳群、相原古墳群、久戸古墳群、百田古墳群、浦谷古墳群と継続し、半田古墳群へと至っている。その後も朝町山ノ口古墳群、大徳町古墳群の調査と連続として続行されている。それらの内容及び相互間の歴史的関連については各々の報告書を参照されたい。ここでは城山南西麓に分布する古墳群について若干記してみたい。

城山は標高317.4mを最高所とし、遠賀郡との境をなしている。中世には宗像氏が許斐山城からこの地に本城を移したことからこの山名が命された。この山麓の標高50～60mにかけて、100余基の古墳が群集する。それらは東から三郎丸古墳群・城ヶ谷古墳群、平等寺(A)古墳群、平等寺B・C(向原古墳群)半田古墳群に区分されるが、地形や歴史の変遷をふまえた細区分が必要であろう。

半田古墳群はこれら古墳群の西端に位置し、20余基が群在している。今回調査した12基の古墳はこれらの中でも西端に占地するものである。東側には現在都市計画道路や学校の建設が予定されており、近年中に大半が発掘調査され、その後消滅する運命にある。その際に群内容を詳細に検討して、群構造の解明を期してもらいたい。

なお半田古墳群の西側に山田川を挟んで広がる丘陵地には6世紀から8世紀にかけての古窯跡群が分布しており、これら窯との需要供給関係の究明も必須である。

III 古墳群の調査

調査区内の丘陵間には数小谷が刻まれているが、古墳は全て丘陵頂部や尾根線上に分布しており、地形上A～Dの4支群に分類した。

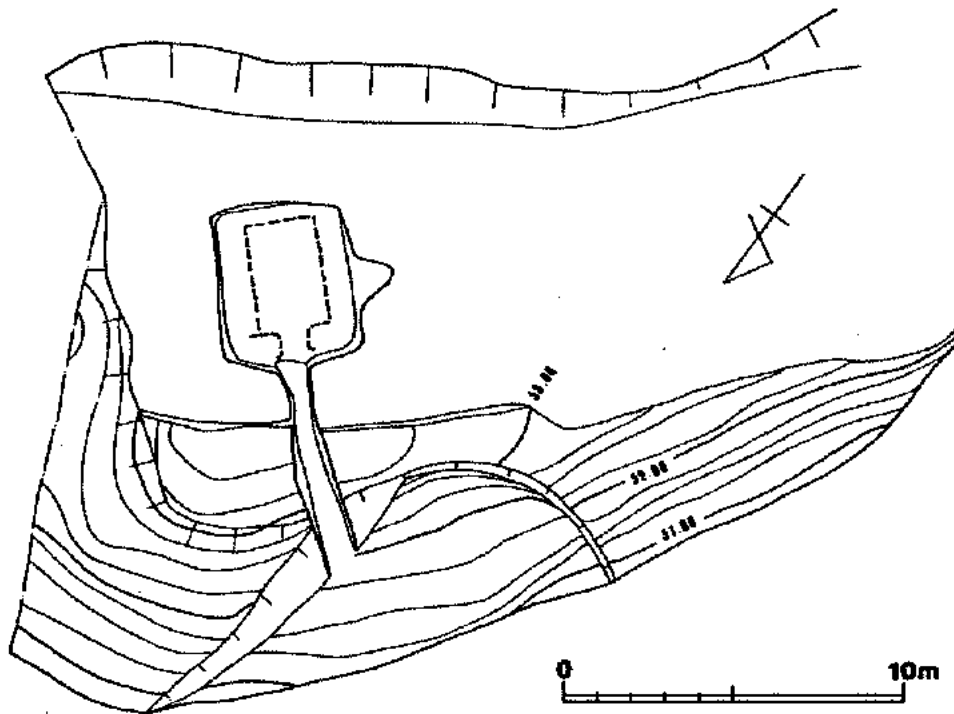
1 A群の調査

南西方向から大きく入り込む谷に南面する丘陵頂部に独立して一基が占地する。なお、このA-1号墳の東北方に約70m離れた丘陵頂部付近に石材が散乱する箇所があり、古墳がさらに1基存在した可能性もあるが、防火帯付設のために重機によって攪乱を受けており、探索調査したものの、実体は不明であった。

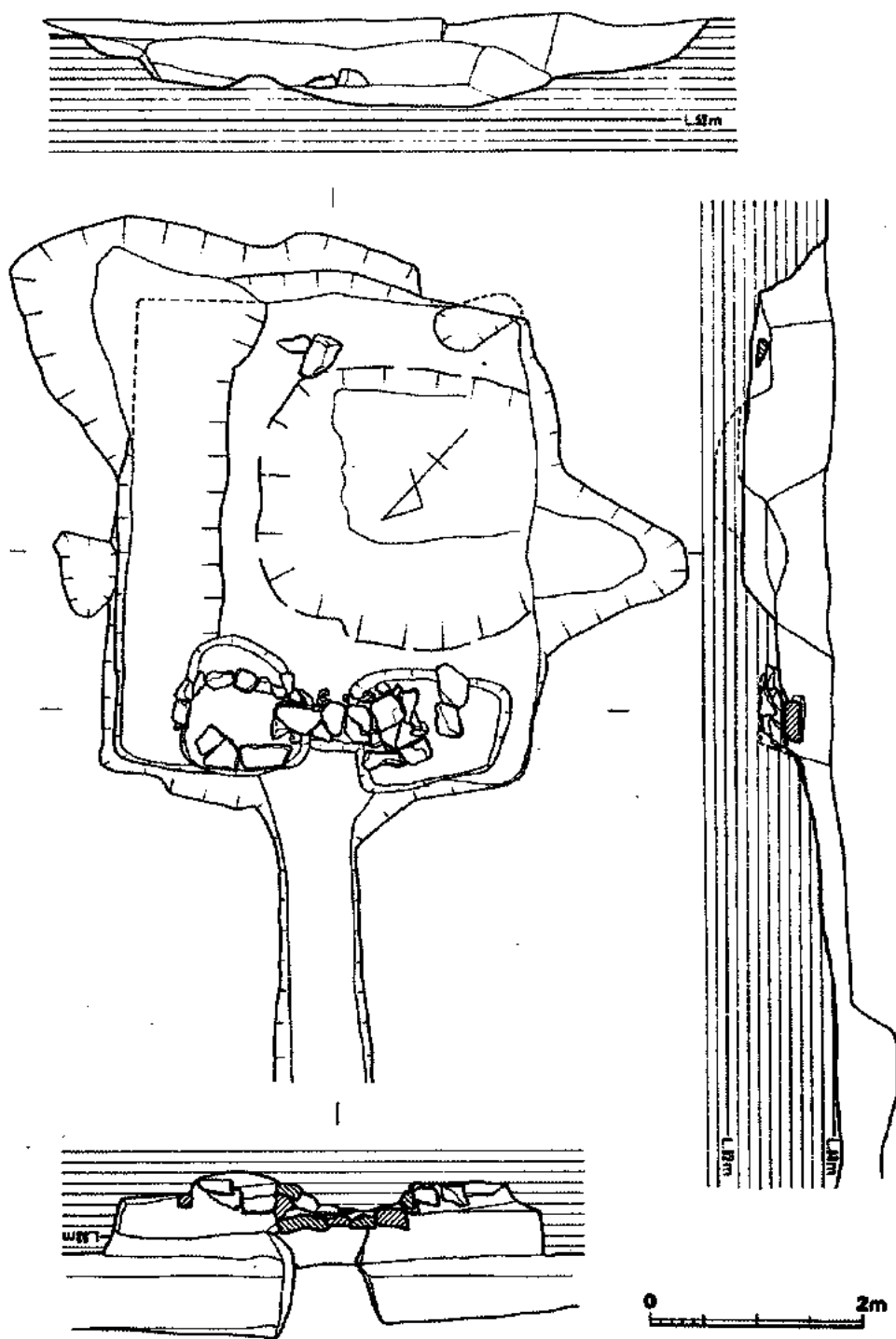
A-1号墳（第3・4図、図版3）

北西方向に開口する単室の横穴式石室である。墳丘、石室共に皆滅的な破壊を受けていた。長さ4.6m、巾4.0mの方形掘り方中に玄門石抜き穴と根石を残し、その間に水平（標高52.75m）に4枚の石を敷いていた。この敷石幅によって、玄門幅は1.2m程であったと推定される。床面はユンボによって大きく掘り抜かれていた。

墓道は掘り方床面より約15cm高く、6.1m伸びていた。



第3図 A-1号墳々丘実測図（1/200）



第4图 A-1号填石室实测图 (1/60) - 5 -

2 B群の調査

調査区東端の南東から北西に伸びる丘陵上に5基の古墳が分布する。南東端は標高61.0mと調査区中の最高所であり、B-1号墳が占拠する。

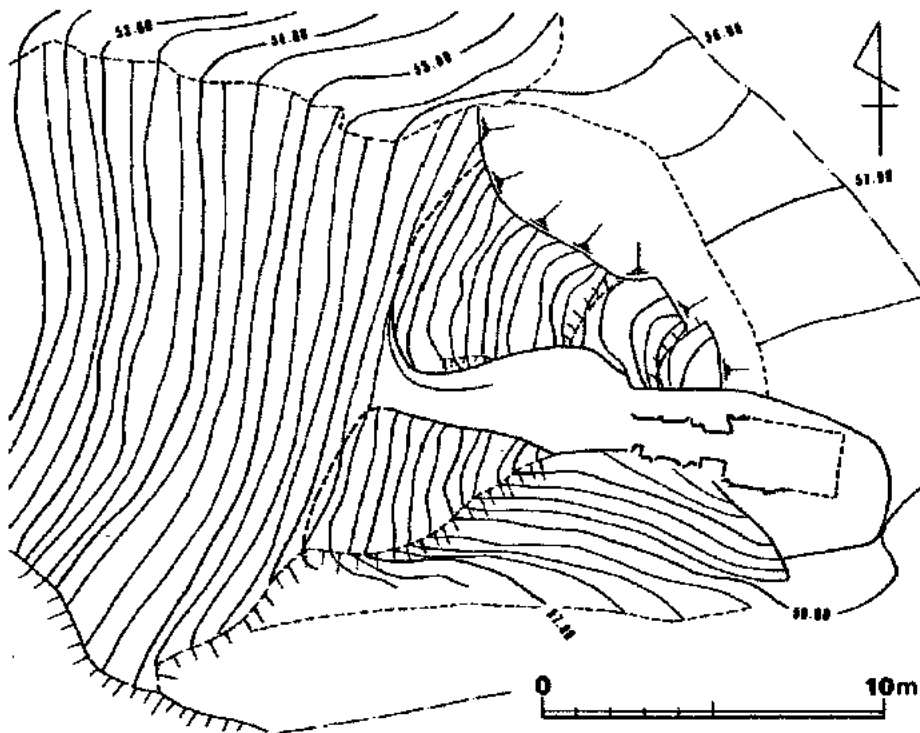
B-1号墳

墳丘(第5図, 図版5)

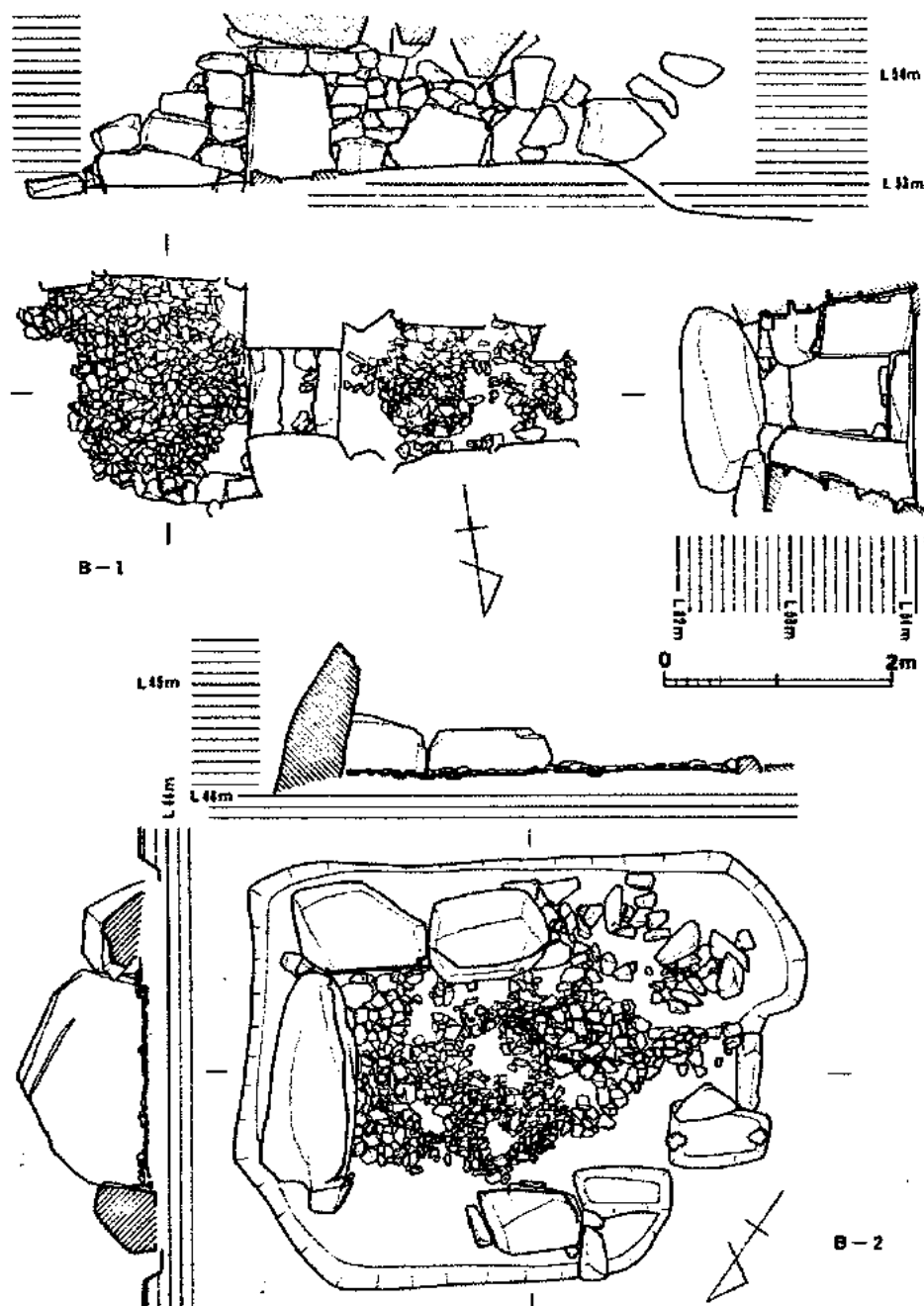
南半から東半にかけては大規模な破壊を受けていた。墳丘の前面は急な斜面になっており、墓道端から墳頂まで4.5mの落差がある。

石室(第6図, 図版5-3)

玄室の奥半が皆滅していたが、掘り方の残痕から西側の谷頭方向に開く長さ6.3mの複室横穴式石室であったと推定される。



第5図 B-1号墳々丘実測図(1/200)



第6図 B-1・2号墳石室実測図 (1/60)

玄室の床面には10～15cm大の円礫が敷かれている。側壁は玄門脇の石材を残すのみであった。腰石は床面から30cmと低く横長の石材を用いており、その上に4～5段架されて天井に至っていたと推定される。

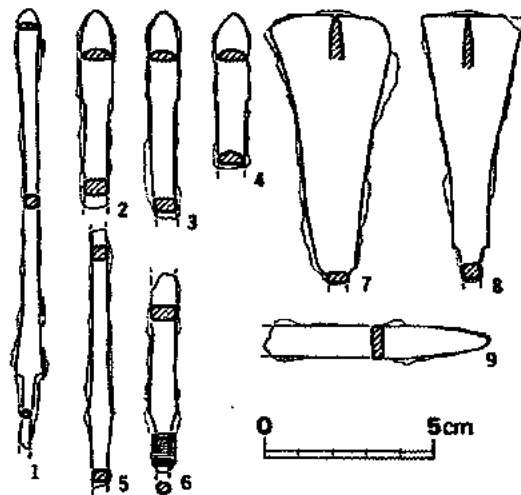
玄門から羨道部にかけての石材はよく残っており、天井石も3枚残っていた。玄門は床面からの高さ約1mの柱状石を用いており、天井石との間に楔状石が1段嵌められている。玄門間の床面には2箇所の支切り石が敷かれている。玄門部から羨道部にかけての床面は傾斜し、羨道外端では玄室より約20cm高まっている。羨道は2.5m伸び、側壁には玄室の用材より一廻り小振りの石材を用いている。天井の架されない羨道外半の側壁用材は墳丘盛土中に嵌め込まれている。床面には玄室床面敷石と同等の礫を敷いている。

出土遺物

玄室と羨道の敷石上から須恵器杯蓋1点(第8図1)と鉄鏃・刀子が散乱して出土した。墓道から若干の須恵器(9)、土師器(12)が、墳丘からは多くの須恵器(2～8・10・11第9図13・14)が出土した。

武器(第7図-1～8)

鉄鏃(1～8) 細根鏃は全て片丸造り柳葉式で、刃部幅6mmの細造りのもの(1)と、10mmとやや広く箆被との境に段部を有するもの(2～4)とがある。広根鏃は円頭式(7)と方頭斧箭式(8)を含む。



第7図 B-1号墳出土鉄器実測図(1/2)

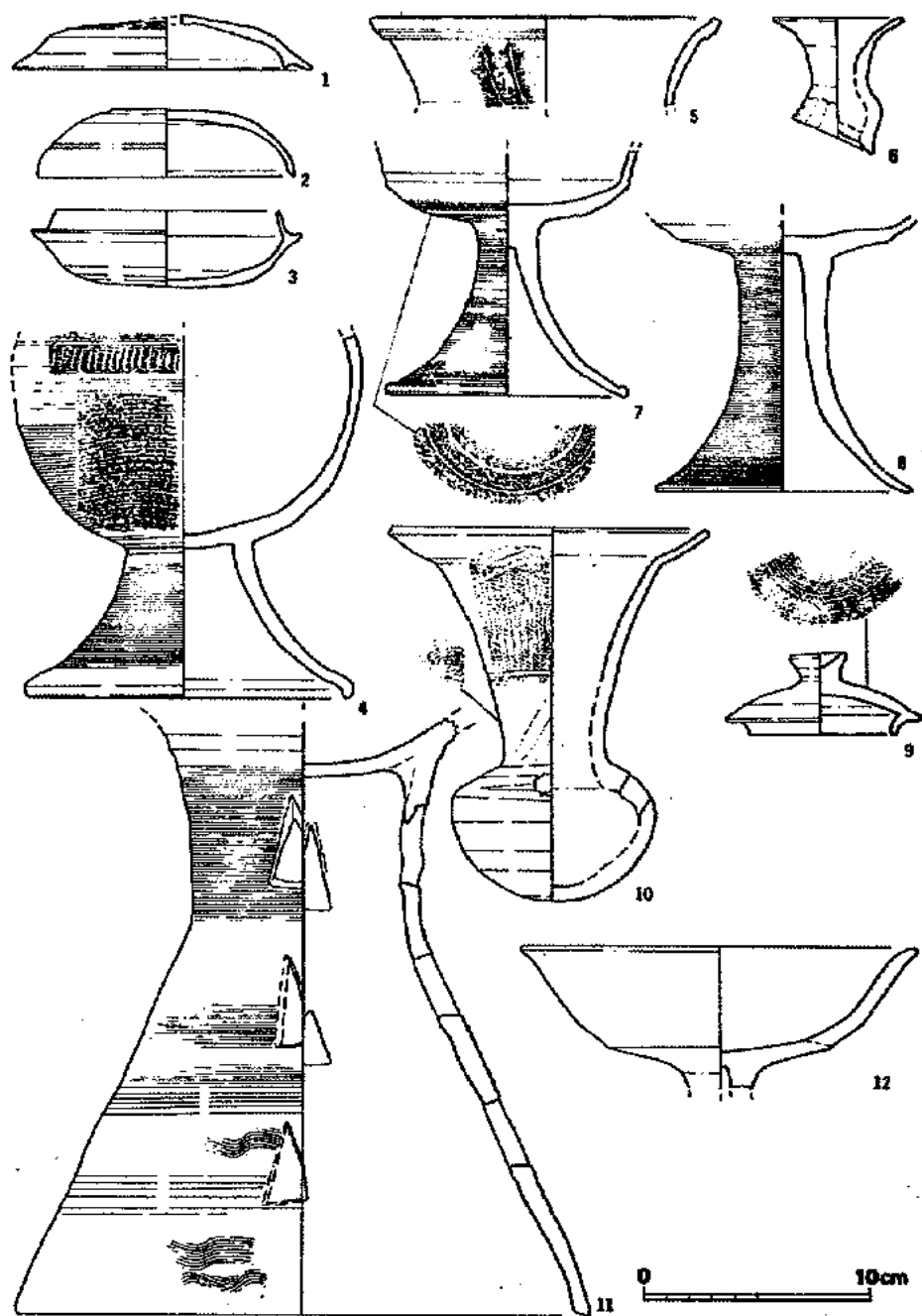
工具(第7図-9)

刀子 茎部のみである。断面長方形で、端部は丸い。

須恵器(第8・9図、図版13)

蓋杯(1～3) 1の蓋は玄室床面の出土品であり、当古墳の最終埋葬時を示すものであろう。身受けのかえりは口縁端部より内側に入る。天井頂部を欠くか、扁平なボタン状ツマミが付されていた可能性もある。口径13.2cm。2と3はセットである。蓋の口縁端部内側に軽い段部を有する。身の立ちあがりは内傾し、端部は丸い。蓋・身共に胎土中に微細な砂を含み、焼き上りは硬質である。2の口径は11.3cm。3の口径は9.9cm。

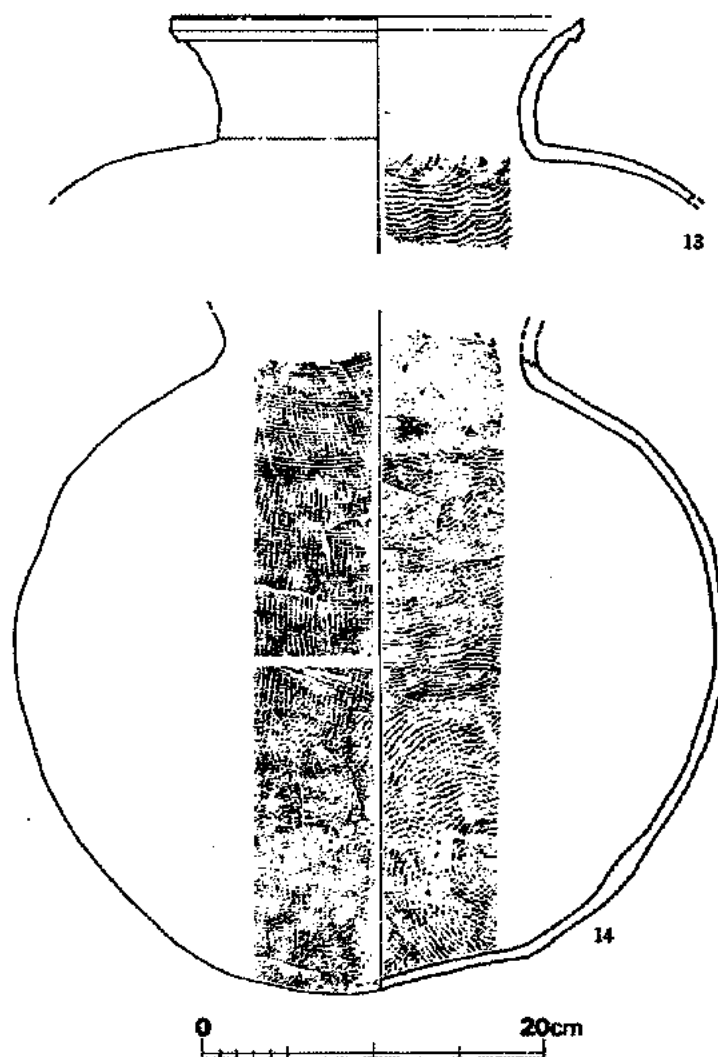
甗(4～6) 4の脚付甗は球形の胴部をもち最大胴部位に櫛刺突紋を配し、胴下半部をカキ



第8图 B-1号出土须惠器实测图① (1/3)

メ調整している。脚部はラッパ状に大きく開き、端部を直立させている。5の口縁部は薄手で口縁部の貼付け凸帯はヨコナデ調整で稜を作り出している。口径15.6cm。6は小持ち壺の子で、中空の段階で親壺に指オサエで貼り付け、その後底部に粘土をつめている。

高杯（7～9） 7・8共に長脚であるが、透しを持たない。杯底部から脚部にかけてはカキメ調整を施している。9は高杯の蓋である。頂部には大きなボタン状ツマミを持ち、天井部に



第9図 B-1号墳出土須恵器実測図②（1/4）

カキメの上から「八」状の刺突紋を繞らしている。身受けのかえりは太く、端部は丸い。

題(10) 頸部は長く、外面に波状紋を配している。口縁部は頸部からさらに外反させ、端部は方形である。球体部の最大胴部位から下は全てヘラケズリ調整である。口径14.3cm、器高16.7cm。

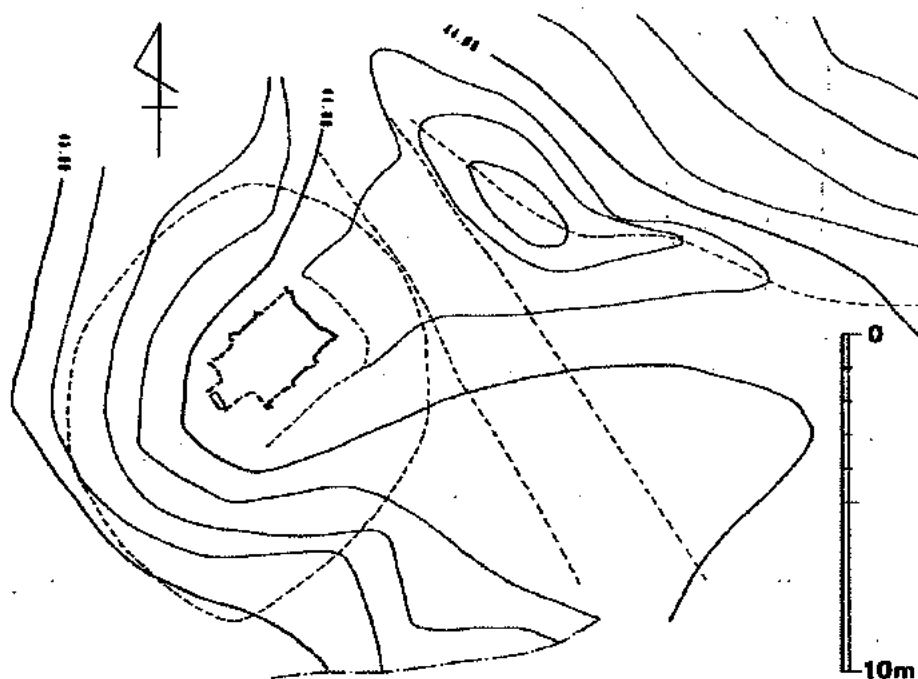
器台(11) 脚部のみである。方形と三角形の三段透しを交互に各2箇所配している。下段透しの上下に3条よりなる沈線を繞らし、その間に波状紋を描いている。脚端部はやや立ち気味である。焼き上りは軟質なため、器壁が剥落し、磨耗している。脚端径25.1cm。

甕(第9図13・14) 13の口縁端部は鋭く三角形に立ち上る。胴部外面はカキメ調整、内面は細かな青海波叩きである。14は口縁部を欠失している。胴部中央が最も脹る。外面は平行叩きの上から部分的にカキメ調整し、内面には細かな青海波叩きである。

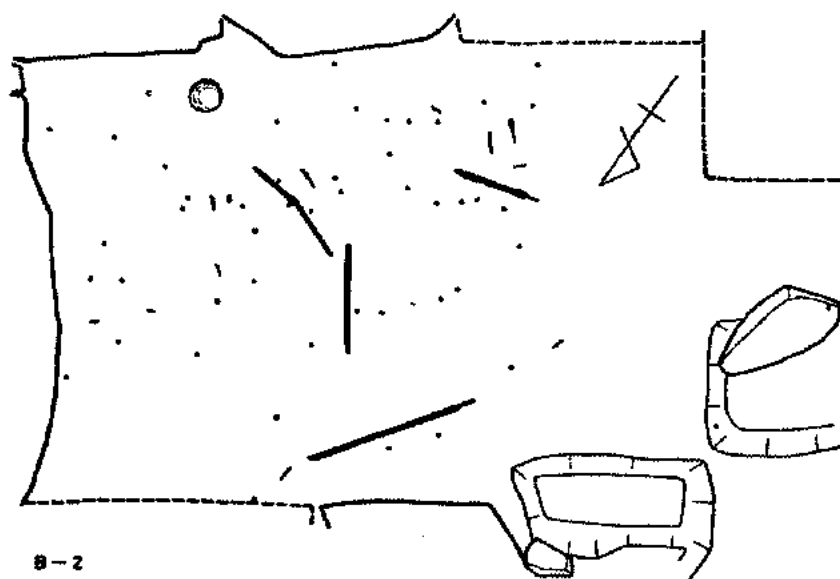
土師器(第8図-12)

高杯 杯部のみである。全体に内厚で、口縁部を僅かに外反させている。内面はミガキ。外面の体部は横方向のハケメ、底部は縦方向のハケメ調整である。

B-2号墳



第10図 B-2号墳々丘実測図(1/200)



B-2



B-3



第11図 B-2・3号墳石室床面遺物出土状況実測図 (1/30)

墳丘 (第10図)

1号墳の北東側約80cmの丘陵鞍部よりやや南西の斜面に寄って位置する。墳丘の盛土はまったく残存せず、地山の削り出しによって、東西10.5m、南北11.5mの円墳になると思われる。

石室 (第6図、図版6)

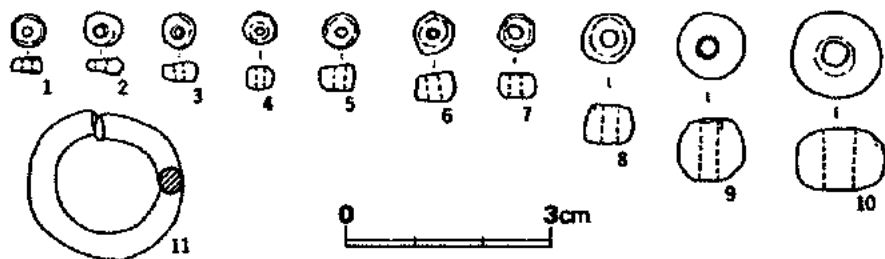
南西に開口する単室の横穴式石室であるが、石材は玄室の腰石と根石を残すのみであった。奥壁は一枚の鏡石を立てて構築されている。側壁は両側とも各3個の腰石を用いているが、そのうち向って右側で2個、左側で1個を残すのみである。玄門は両側とも掘り抜かれ、掘り方と根石を残すのみである。玄門の外端には玄門幅いっぱいの支切り石が置かれている。玄室から玄門部にかけては10~15cm大の平坦な礎を敷いている。

出土遺物 (第11~15図)

出土状況 (第11図、図版6-2)

墳丘及び石室が壊滅的な破壊を受けていたにもかかわらず、玄室の床面からは副葬品がオリジナルな状況で置かれていた (少なくとも最終埋葬時の)。鉄刀5振りのうち、小刀3振りは玄室中央にあり、そのうち1振りは玄室主軸に対して横方向に、他の2振りは茎を合わせて斜め方向に置かれていた。大刀1振りは左側壁側に主軸とほぼ平行に、また小刀1振りは玄室中央よりやや右側に主軸とほぼ平行に置かれていた。両者とも茎は玄門側である。

装飾品及び鉄鏃・刀子は床面全体にバラついていた。



第12図 B-2号墳出土装身具実測図 (1/1)

	器種	材質	色	径	高	図
1	小玉	ガラス	ライトブルー	5.0	2.2	1
2	"	"	"	5.3	2.5	2
3		"	"	4.8	3.4	3
4		"	"	4.2	3.6	4
5		"	"	5.0	3.8	5

	器種	材質	色	径	高	図
6	小玉	ガラス	ライトブルー	5.8	4.4	6
7	"	"	紺	4.9	3.6	7
8	"	"	"	7.5	6.7	8
9	丸玉	"	緑	10.0	19.2	9
10	"	"	"	13.1	9.1	10

第1表 B-2号墳出土玉類計測表 (単位mm)

須恵器は杯身が床面から、杯蓋が床上攪乱土中から出土した。

鍍身具 (第12図)

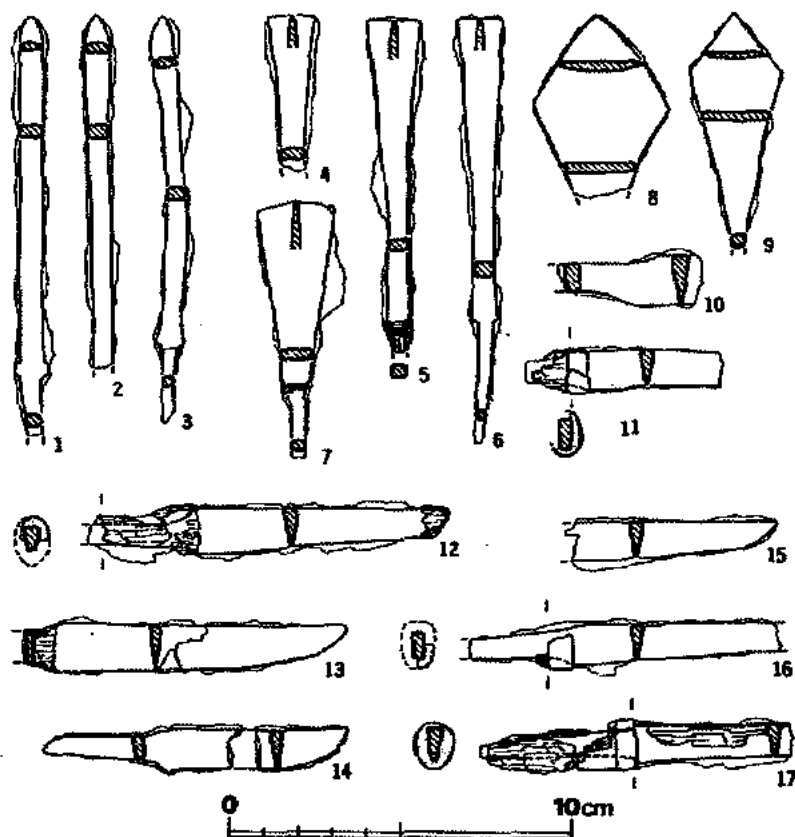
ガラス小玉8個とガラス丸玉2個、耳環1である。

1～6は明るいライトブルー色を呈し、7・8は紺色に発色している。9・10は大きな丸玉で、明るい緑色である。

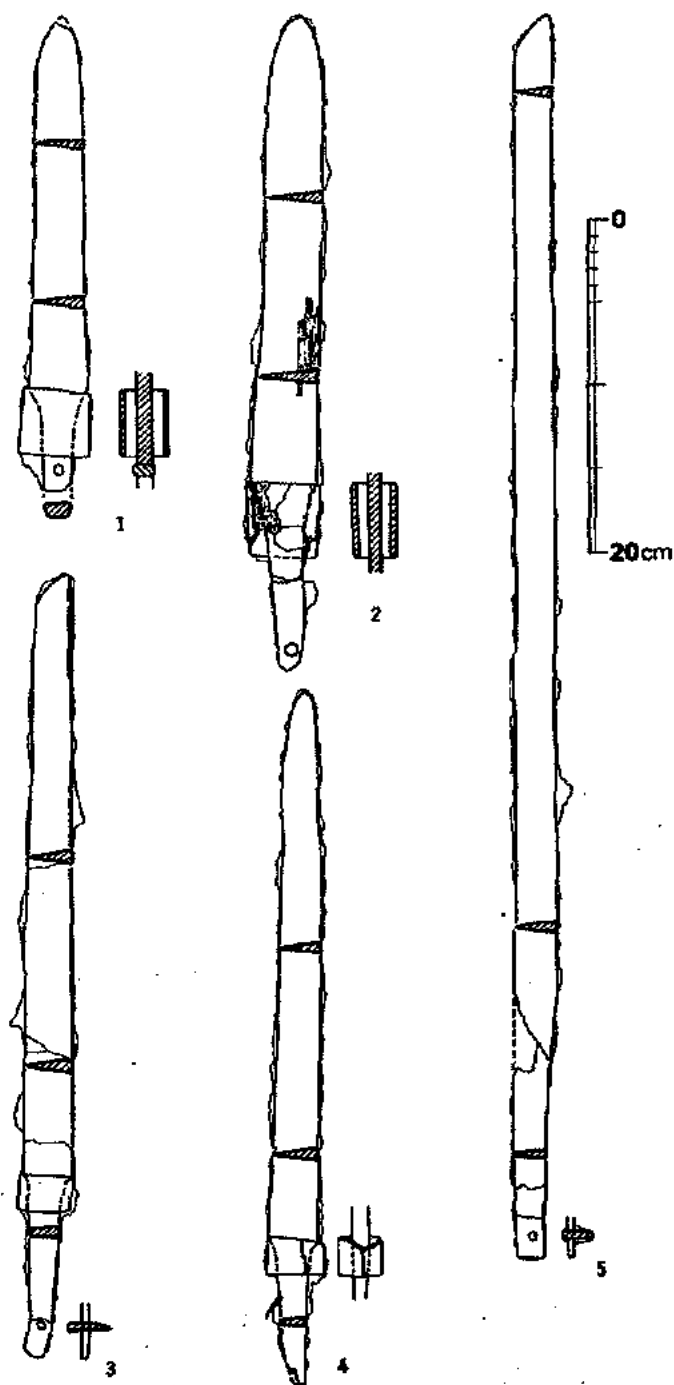
耳環は環径22.5mm、断面径3.5mmの細味の金銅貼りで、一部腐蝕している。

武器 (第13・14図)

鉄鏃 (第13図) 細根鏃中には刃部形状が片丸造り柳葉式 (1～3)、方頭斧箭式 (4～6) と円頭式がある。6は完形で全長12.7cm、刃部幅1.4cmであり、筈披の断面は長方形、茎のそれは円形である。広根鏃は2点共 (8・9) 定角式であるが、8は刃部が丸味を持ち、最大幅



第13図 B-2号墳出土鉄器実測図① (1/2)



は4.0cmと広い。9
は刃部が直線状で、
最大幅は2.7cmであ
る。

鉄刀（第14図）

小刀4振り、大刀1
振りである。1～4
は両関平造りの小刀
で、全て把口金物が
付されている。2は
鞘及び把の木質が観
察される。1・2・
4の刀背部先端から
錆にかけての平面形
は剣状に左右対称形
に膨らむ。刃部断面
は蛤刃状の肉は持た
ず、二等辺三角形状
である。目釘は各1
本。各刀の計測値は、
1：刃部長22.3cm、
刃部幅3.1cm、茎長
6.2cm、2：刃部長
28.0cm、刃部幅3.5
cm、茎長11.1cm、3
：刃部長33.8cm、刃
部幅2.6cm、茎長10
.7cm、4：刃部長34
.8cm、刃部幅2.5cm、
茎長8.2cmである。

5の大刀は平造り
で、細身の直刀であ
る。背関は軽いカー

第14図 B-2号墳出土鉄器実測図②（1/4）

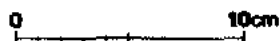
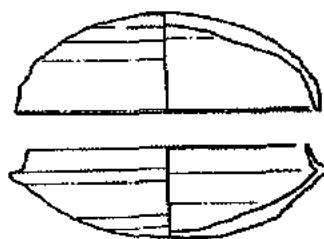
ブをなす。鉈はあまり膨らみを持たない。刃部長58.3cm、
刃部幅2.5cm、茎長16.1cm。

工具（第13図）

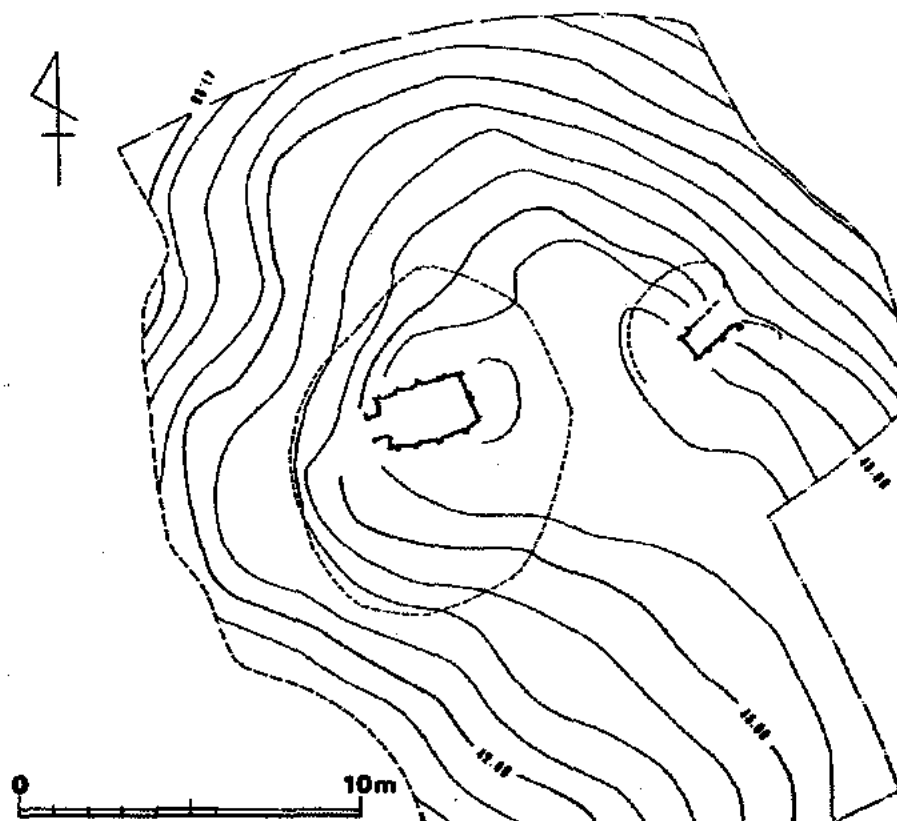
刀子が8本分出土したが完形品はない。把口金物は11・
12・16・17で認められ、茎には木質（11・16）や鹿角（12
・17）の把が残っている。また12・17の刃部は鞘の木質が
観察される。

須恵器（第15図）

蓋杯である。1の蓋は天井部が丸く、広くへラケズリし
ている。口縁端部は太く、丸い。口径13.4cm、器高4.5cm。
2の身は立ち上りが細く、体部も薄手である。口径12.4cm、



第15図 B-2号墳出土須恵器
実測図（1/3）



第16図 B-3・4号墳々丘実測図（1/200）

器高 4.1 cm。両者共に灰黒色から黒色を呈し、胎土中に多くの砂粒を含んでいる。焼成は硬質の上りである。

B-3号墳

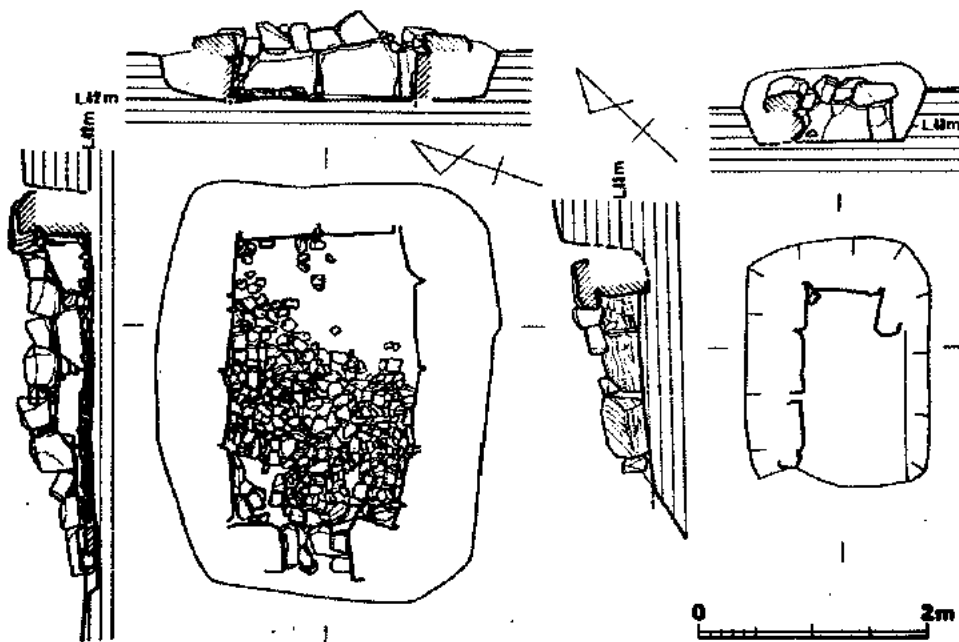
墳丘 (第16図)

B 2号墳から約 9.5 m 北東側の丘陵頂部に占地し、さらに 9.5 m 東北側の一段下った狭い丘陵の北端頂部に 5号墳が位置している。墳丘の盛土は皆滅的な破壊を受けて、まったく残していない。地山の削り出し範囲は南北 10.2 m、東西 8.1 m の楕円形を呈している。

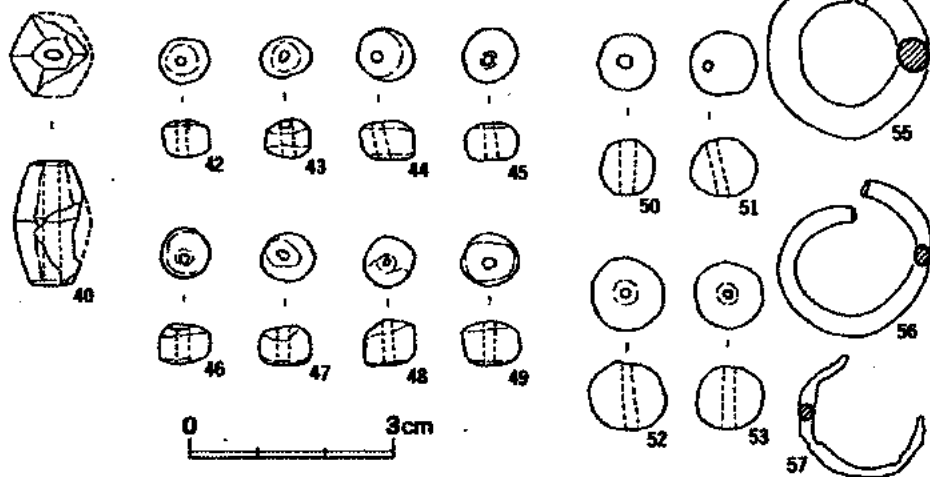
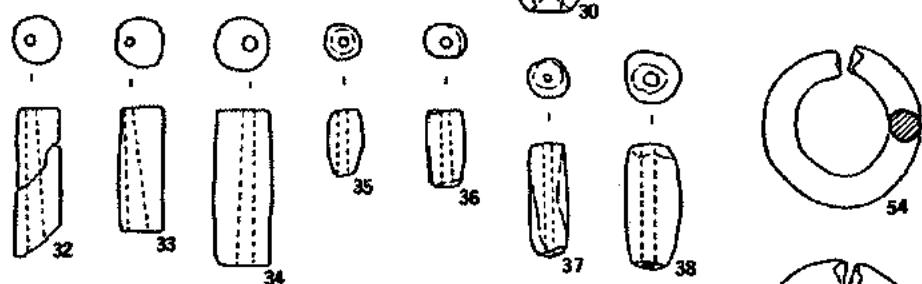
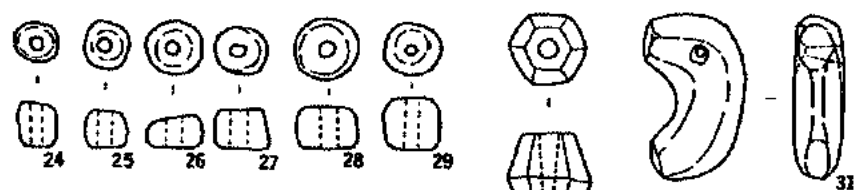
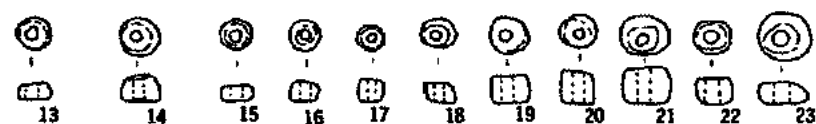
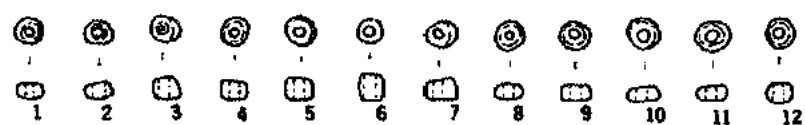
石室 (第17図)

東西 3.6 m、南北 2.9 m の隅丸方形の掘り方中に築かれた、西側に開口する単室の横穴式石室である。奥壁は 2 枚、側壁は左右各 4 枚の腰石を用いている。奥壁には横幅 70 cm 前後、床面からの高さ 50 cm 前後の石材を用いているものの、側壁の腰石は玄門側に向うにつれ小振りになり、床面からの高さは 10 cm にも充たなくなる。側壁の平面プランはやや中膨らみしており、床面には 10~15 cm 大の平状角礫を敷いている。玄門には柱状にならない偏平な石材を用いており、その間幅 80 cm の間に、閉塞石基盤石と思える石材が若干残っていた。なお、墓道は認められなかった。

出土遺物 (第11・18・19)



第17図 B-3・4号墳石室実測図 (1/60)



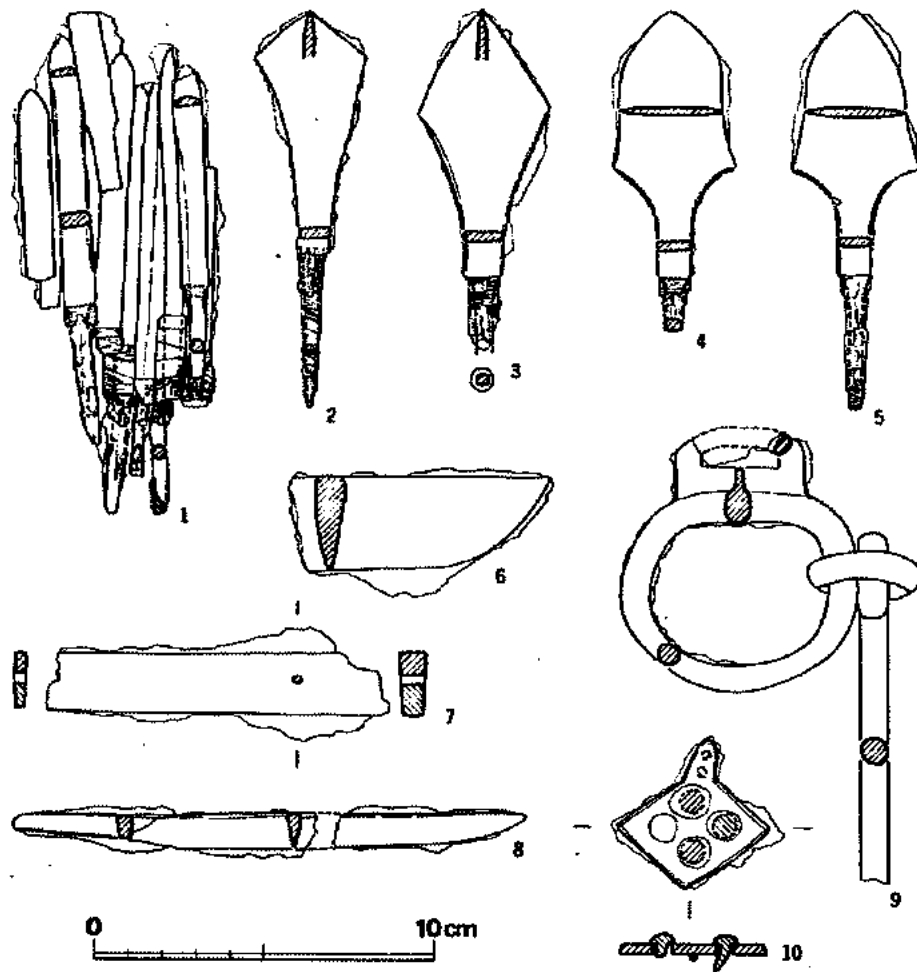
第18图 B-3号填出土装身具实测图(1/1)

出土状況（第11回）

床面上の北側壁下から広根の鉄鍔が数本づつまとまって、玄門とのコーナー部分に馬具が置かれていた。南側壁下中央部からは細根鍔と刀子が密集して出土した。玉類が床面の奥半全体に散布し、奥壁側から出土した大刀が破片でしかなかったことから、追葬時の攪乱があったと思われる。

装身具（第18回）

ガラス小玉29個（1～29）、水晶製切子玉1個(30)、水晶製勾玉1個(31)、碧玉製管玉3個



第19図 B-3号墳出土鉄器実測図（1/2）

(32~34)、土製管玉5個(35~39)、土製切子玉2個(40・41)、土製小(丸)玉293個(42~334)が出土した。ガラス小玉はライトブルーからライトグリーンに発色した透明度の高いもの(1~14)と紺色の透明度の低い鉛ガラス(15~29)とがあり、後者の方が大きい。土製切子玉は水晶製品によく見られるような稜をきっちりと作り出している。土製の小(丸)玉は非常に数多く、はっきり小玉と認められるもの(42)から丸玉と認められるもの(50~53)を含め、大半がその中間形をなしている。製法は1個1個丸めて丁寧に表面を磨いているが、焼成時に数個まとめて串刺しにして焼いており、玉間の接面は焼成不良か、密着している。

耳環(54~57) 54と55、56と57がセットをなすと考えられる。前者は金銅製で、金箔がほぼ完存している。環径2.4cm。後者は箔をまったく残さない銅心のみである。

武器(第19図1~7)

鎌(1~5) 1は12本の片丸造り柳葉葉式細根鎌が錆で密着したものである。刃部から莖被にかけては全て8cm前後、全長は12.2cm~13.7cmである。茎には矢柄とその上に巻かれた樹皮が観察される。広根鎌には斧簡式(2)と定角式(3)、変形定角式(4・5)とがある。茎には矢柄とその上に巻いた樹皮とがいづれも認められるが、5の茎下端部には繊維が観察され、繊維で茎を巻いてから、矢柄に差込んだと考えられる。2は完形品で全長11.8cm、刃部最大幅3.3cm。5は全長11.9cm、刃部最大幅3.8cm。

大刀(6・7) 鉈と茎部のみが出土した。刃部の断面は蛤刃状にやや膨らむ。茎には2個所の目釘穴があり、かなりの長刀であったと思われる。

工具(8)

刀子 刃部中央が欠損するが、細味の直刃で鉈は僅かに反り気味である。茎と刀身峰部に杞と鞘の木質が付着している。なお杞と茎の間には繊維(撚りは見えない)が観察される。

馬具(9・10)

9は素面の鏡板で一对出土した。環径は7.0×6.0cmの楕円形である。立間は幅3.9cmで、頂部は丸味を持つ。鏡板には小環を取り付けてから引手あるいは銜を連係させている。10は鉄

第2表 B-3号墳出土玉類計測表

	番号	材質	色	径	高	図
1	小玉	ガラス	ライトブルー	3.9	2.2	1
2	"	"	"	3.8	2.6	2
3	"	"	"	4.6	3.3	3
4	"	"	ライトグリーン	3.9	3.0	4
5	"	"	"	4.4	3.5	5
6	"	"	"	3.6	4.0	6
7	"	"	ライトブルー	4.3	3.2	7
8	"	"	"	4.6	2.6	8
9	小玉	ガラス	グリーン	4.6	2.8	9
10	"	"	ブルー	4.7	2.2	10
11	"	"	"	4.6	2.6	11
12	"	"	グリーン	4.6	3.4	12
13	"	"	"	4.8	2.7	13
14	"	"	ライトブルー	5.5	4.5	14
15	"	"	紺	4.6	2.6	15
16	"	"	"	4.6	3.0	16

	器種	材質	色	径	高	図
17	小玉	ガラス	紺	4.1	3.7	17
18	"	"	"	4.4	3.0	18
19	"	"	"	5.1	4.1	19
20	"	"	"	4.9	5.0	20
21	"	"	"	7.0	5.1	21
22	"	"	"	5.4	4.0	22
23	"	"	"	7.3	3.5	23
24	"	"	"	6.2	6.6	24
25	"	"	"	6.9	5.8	25
26	"	"	"	8.1	4.9	26
27	"	"	"	8.0	6.1	27
28	"	"	"	9.3	6.2	28
29	"	"	"	8.2	7.5	29
30	切子玉	水晶	白	11.1	12.7	30
31	勾玉	"	"	-	24.0	31
32	管玉	碧玉	緑	7.0	22+α	32
33	"	"	"	7.0	18.5	33
34	"	"	"	8.6	23.4	34
35	"	土製	灰	5.6	10.0	35
36	"	"	"	5.6	11.2	36
37	"	"	"	6.0	16.3	37
38	"	"	"	8.2	18.6	38
39	"	"	"	6.8	22.0	-
40	切子玉	"	"	11.8	18.8	40
41	"	"	"	10.6	11+α	-
42	丸玉	"	"	7.0	5.7	42
43	小玉	"	"	6.8	5.6	43
44	"	"	"	7.7	5.9	44
45	"	"	"	8.0	5.9	45
46	"	"	"	7.0	5.6	46
47	"	"	"	7.8	6.0	47
48	"	"	"	7.4	6.7	48
49	"	"	"	8.5	6.6	49
50	丸玉	"	"	8.6	8.1	50
51	"	"	"	8.9	8.7	51
52	"	"	"	11.5	10.0	52
53	"	"	"	10.7	9.8	53
54	小丸玉	"	黒	7.5	6.6	-
55	"	"	"	7.6	6.6	-
56	"	"	"	7.6	7.2	-
57	"	"	"	7.7	6.8	-
58	"	"	"	7.8	5.9	-
59	"	"	"	7.5	5.7	-
60	"	"	"	7.6	6.5	-
61	"	"	"	8.0	6.5	-
62	"	"	"	8.0	7.0	-
63	"	"	"	8.1	5.9	-
64	"	"	"	8.4	7.5	-
65	"	"	"	8.6	6.9	-
66	"	"	"	7.9	7.3	-
67	"	"	"	8.0	7.1	-
68	"	"	"	9.1	6.9	-
69	"	"	"	8.0	6.2	-

	器種	材質	色	径	高	図
70	小丸玉	土製	黒	8.1	6.1	-
71	"	"	"	8.1	7.9	-
72	"	"	"	8.2	7.0	-
73	"	"	"	8.1	6.6	-
74	"	"	"	8.2	6.1	-
75	"	"	"	8.1	8.0	-
76	"	"	"	8.7	7.9	-
77	"	"	"	8.1	8.1	-
78	"	"	"	7.9	8.0	-
79	"	"	"	8.2	7.0	-
80	"	"	"	8.1	7.8	-
81	"	"	"	8.1	8.2	-
82	"	"	"	8.0	7.0	-
83	"	"	"	8.5	7.6	-
84	"	"	"	8.7	7.4	-
85	"	"	"	8.7	7.5	-
86	"	"	"	8.8	8.4	-
87	"	"	"	8.7	7.2	-
88	"	"	"	9.5	8.3	-
89	"	"	"	9.5	7.0	-
90	"	"	"	9.5	8.4	-
91	"	"	"	8.6	7.9	-
92	"	"	"	9.0	8.8	-
93	"	"	"	11.0	8.1	-
94	"	"	"	9.0	8.1	-
95	"	"	"	9.1	6.6	-
96	"	"	"	9.2	8.9	-
97	"	"	"	9.6	8.8	-
98	"	"	"	8.6	7.8	-
99	"	"	"	9.0	8.9	-
100	"	"	"	8.5	7.0	-
101	"	"	"	8.9	8.0	-
102	"	"	"	7.8	7.1	-
103	"	"	"	8.5	7.7	-
104	"	"	"	10.0	7.1	-
105	"	"	"	8.8	9.0	-
106	"	"	"	8.6	9.1	-
107	"	"	"	8.8	7.6	-
108	"	"	"	8.8	8.0	-
109	"	"	"	9.4	8.1	-
110	"	"	"	9.2	8.5	-
111	"	"	"	8.9	8.0	-
112	"	"	"	9.4	8.3	-
113	"	"	"	8.9	7.8	-
114	"	"	"	9.6	8.5	-
115	"	"	"	9.1	8.6	-
116	"	"	"	9.0	6.6	-
117	"	"	"	10.0	8.3	-
118	"	"	"	9.6	8.9	-
119	"	"	"	9.6	8.8	-
120	"	"	"	9.2	8.4	-
121	"	"	"	9.8	9.0	-
122	"	"	"	10.0	8.2	-

	標 識	材 質	色	徑	高	備 註
123	小丸玉	土 製	黒	10.1	7.9	—
124	"	"	"	10.8	8.9	—
125	"	"	"	10.6	9.6	—
126	"	"	"	10.2	8.6	—
127	"	"	"	10.3	8.6	—
128	"	"	"	11.1	8.0	—
129	"	"	"	10.4	8.4	—
130	"	"	"	10.2	9.0	—
131	"	"	"	11.0	8.3	—
132	"	"	"	10.2	9.0	—
133	"	"	"	10.2	8.6	—
134	"	"	"	10.8	欠	—
135	"	"	"	10.1	11.0	—
136	"	"	"	10.6	9.9	—
137	"	"	"	11.6	8.8	—
138	"	"	"	11.1	9.2	—
139	"	"	"	10.0	10.0	—
140	"	"	"	11.1	9.6	—
141	"	"	"	10.0	10.7	—
142	"	"	"	10.6	9.0	—
143	"	"	"	10.3	8.6	—
144	"	"	"	10.8	9.0	—
145	"	"	"	10.8	10.4	—
146	"	"	"	10.5	9.6	—
147	"	"	"	10.5	10.0	—
148	"	"	"	10.8	9.2	—
149	"	"	"	11.5	8.6	—
150	"	"	"	10.5	8.3	—
151	"	"	"	10.1	8.7	—
152	"	"	"	10.7	10.3	—
153	"	"	"	9.6	9.2	—
154	"	"	"	9.2	9.6	—
155	"	"	"	9.9	8.8	—
156	"	"	"	11.2	11.0	—
157	"	"	"	10.6	8.6	—
158	"	"	"	9.2	8.7	—
159	"	"	"	9.6	9.7	—
160	"	"	"	10.0	9.5	—
161	"	"	"	10.5	9.0	—
162	"	"	"	10.0	10.4	—
163	"	"	"	11.5	10.4	—
164	"	"	"	10.8	9.2	—
165	"	"	"	10.0	欠	—
166	"	"	"	9.2	欠	—
167	"	"	"	8.3	7.4	—
168	"	"	"	9.0	7.4	—
169	"	"	"	9.6	8.3	—
170	"	"	"	11.2	10.0	—
171	"	"	"	9.5	砂 着	—
172	"	"	"	9.5		—
173	"	"	"	8.6	砂 着	—
174	"	"	"	8.4		—
175	"	"	"	7.0	5.3	—
176	小丸玉	土 製	黒	8.3	5.7	—
177	"	"	"	6.9	5.4	—
178	"	"	"	8.6	7.1	—
179	"	"	"	9.0	7.1	—
180	"	"	"	9.1	9.7	—
181	"	"	"	10.4	9.1	—
182	"	"	"	9.7	8.9	—
183	"	"	"	10.5	9.0	—
184	"	"	"	9.8	7.8	—
185	"	"	"	10.1	7.9	—
186	"	"	"	10.5	10.2	—
187	"	"	"	9.4	7.8	—
188	"	"	"	9.2	7.1	—
189	"	"	"	8.0	6.0	—
190	"	"	"	8.1	6.6	—
191	"	"	"	8.1	6.3	—
192	"	"	"	8.8	8.0	—
193	"	"	"	9.5	8.1	—
194	"	"	"	8.1	6.6	—
195	"	"	"	8.6	6.8	—
196	"	"	"	8.1	7.2	—
197	"	"	"	8.2	5.6	—
198	"	"	"	9.5	7.7	—
199	"	"	"	9.0	7.7	—
200	"	"	"	10.1	7.9	—
201	"	"	"	8.8	6.9	—
202	"	"	"	9.1	7.2	—
203	"	"	"	9.0	8.3	—
204	"	"	"	8.8	6.9	—
205	"	"	"	8.8	7.7	—
206	"	"	"	7.9	7.3	—
207	"	"	"	7.1	5.4	—
208	"	"	"	8.0	7.3	—
209	"	"	"	8.0	7.3	—
210	"	"	"	9.4	8.2	—
211	"	"	"	9.6	7.9	—
212	"	"	"	9.6	8.0	—
213	"	"	"	9.2	8.0	—
214	"	"	"	9.2	7.8	—
215	"	"	"	9.4	8.1	—
216	"	"	"	9.0	7.6	—
217	"	"	"	9.4	8.3	—
218	"	"	"	9.8	8.6	—
219	"	"	"	9.8	8.7	—
220	"	"	"	9.5	8.0	—
221	"	"	"	9.2	7.6	—
222	"	"	"	8.8	7.8	—
223	"	"	"	9.5	7.1	—
224	"	"	"	8.8	7.8	—
225	"	"	"	8.4	8.1	—
226	"	"	"	9.0	6.9	—
227	"	"	"	9.2	8.2	—
228	"	"	"	9.8	7.9	—

	器種	材質	色	径	高	図
229	小丸玉	土製	黒	7.8	7.3	-
230	"	"	"	7.2	4.5	-
231	"	"	"	9.4	6.1	-
232	"	"	"	8.2	6.5	-
233	"	"	"	8.9	7.8	-
234	"	"	"	10.7	8.0	-
235	"	"	"	9.9	7.5	-
236	"	"	"	9.8	7.5	-
237	"	"	"	9.8	7.9	-
238	"	"	"	10.0	7.9	-
239	"	"	"	9.7	9.0	-
240	"	"	"	10.4	10.8	-
241	"	"	"	10.4	9.0	-
242	"	"	"	9.9	8.6	-
243	"	"	"	9.9	8.9	-
244	"	"	"	10.2	8.2	-
245	"	"	"	9.0	8.8	-
246	"	"	"	9.9	9.1	-
247	"	"	"	9.8	7.7	-
248	"	"	"	9.1	8.5	-
249	"	"	"	9.8	9.0	-
250	"	"	"	9.2	8.0	-
251	"	"	"	9.2	9.0	-
252	"	"	"	9.6	9.0	-
253	"	"	"	9.0	8.9	-
254	"	"	"	9.2	7.8	-
255	"	"	"	9.0	7.8	-
256	"	"	"	8.1	6.2	-
257	"	"	"	9.3	8.2	-
258	"	"	"	8.8	7.8	-
259	"	"	"	8.6	7.4	-
260	"	"	"	8.8	7.6	-
261	"	"	"	9.1	8.7	-
262	"	"	"	9.4	7.8	-
263	"	"	"	9.6	8.0	-
264	"	"	"	8.0	7.3	-
265	"	"	"	7.8	7.0	-
266	"	"	"	8.1	7.3	-
267	"	"	"	7.9	5.9	-
268	"	"	"	8.9	8.5	-
269	"	"	"	8.8	7.5	-
270	"	"	"	8.6	8.8	-
271	"	"	"	9.5	9.0	-
272	"	"	"	9.9	8.1	-
273	"	"	"	8.7	7.8	-
274	"	"	"	8.8	7.5	-
275	"	"	"	9.1	8.8	-
276	"	"	"	11.0	8.9	-
277	"	"	"	8.0	6.2	-
278	"	"	"	10.5	8.3	-
279	"	"	"	9.0	8.0	-
280	"	"	"	9.2	7.1	-
281	"	"	"	7.8	6.0	-

	器種	材質	色	径	高	図
282	小丸玉	土製	黒	10.0	10.0	-
283	"	"	"	9.0	7.9	-
284	"	"	"	8.1	7.0	-
285	"	"	"	7.8	5.8	-
286	"	"	"	7.7	7.0	-
287	"	"	"	10.6	9.3	-
288	"	"	"	9.6	8.5	-
289	"	"	"	10.2	9.0	-
290	"	"	"	9.8	8.3	-
291	"	"	"	9.5	8.2	-
292	"	"	"	10.5	9.0	-
293	"	"	"	8.8	8.0	-
294	"	"	"	8.2	7.9	-
295	"	"	"	9.0	8.1	-
296	"	"	"	9.1	8.6	-
297	"	"	"	8.9	7.8	-
298	"	"	"	8.9	8.0	-
299	"	"	"	10.2	9.6	-
300	"	"	"	8.9	7.8	-
301	"	"	"	8.1	7.7	-
302	"	"	"	8.1	7.5	-
303	"	"	"	8.6	7.6	-
304	"	"	"	9.2	9.3	-
305	"	"	"	8.9	9.7	-
306	"	"	"	10.5	9.2	-
307	"	"	"	8.8	8.0	-
308	"	"	"	9.0	8.8	-
309	"	"	"	10.8	10.0	-
310	"	"	"	9.2	8.0	-
311	"	"	"	8.6	7.6	-
312	"	"	"	10.9	10.7	-
313	"	"	"	11.3	9.8	-
314	"	"	"	11.1	9.0	-
315	"	"	"	8.2	7.8	-
316	"	"	"	8.0	7.5	-
317	"	"	"	8.9	8.2	-
318	"	"	"	9.4	8.8	-
319	"	"	"	10.0	8.5	-
320	"	"	"	9.2	7.8	-
321	"	"	"	9.3	8.8	-
322	"	"	"	7.0	5.3	-
323	"	"	"	8.7	8.0	-
324	"	"	"	9.0	6.8	-
325	"	"	"	9.0	7.0	-
326	"	"	"	9.5	6.0	-
327	"	"	"	9.4	8.1	-
328	"	"	"	9.5	9.0	-
329	"	"	"	11.1	10.0	-
330	"	"	"	11.0	8.8	-
331	"	"	"	10.2	9.2	-
332	"	"	"	11.1	9.6	-
333	"	"	"	欠	欠	-
334	"	"	"	欠	欠	-

地鉄留め金具で、菱形体部の頂部にたぶん小鉄2個を打った立附を付している。

なお、兵庫縣一連が共伴しているが、鉄が甚しく、計測不能であった。

B-4号墳

墳丘(第16図)

B3号墳の東に接した丘陵斜面に台地する。墳丘盛土はまったく認められず、地山の削り出しによって経4m前後の小円墳ではなかったかと推定される。

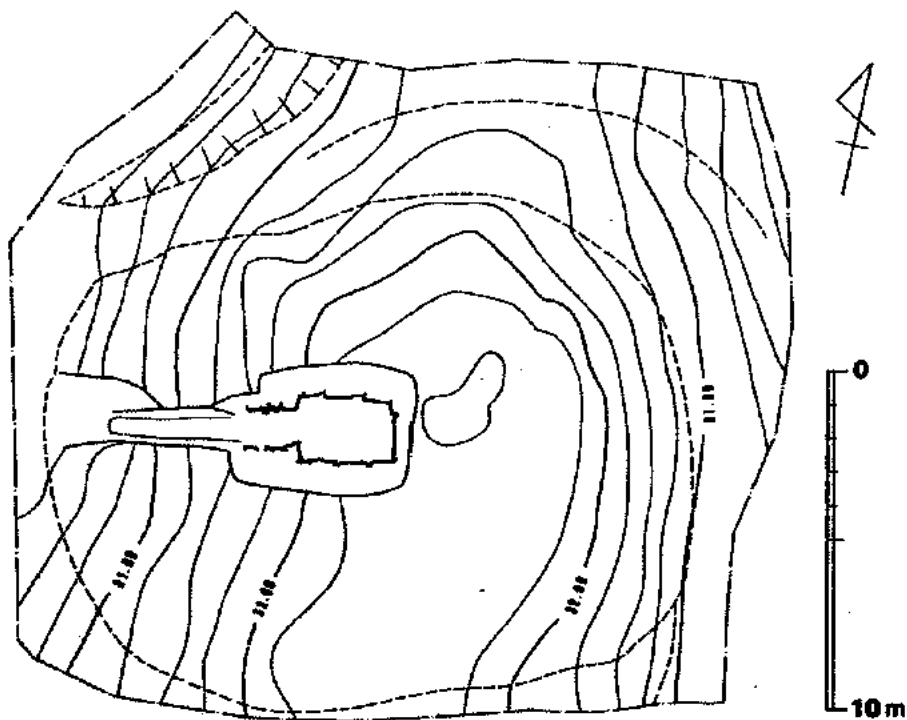
石室(第17図、図版7-2)

東西2.2m \pm 、南北1.6mの隅丸方形の掘り方中に築かれた、南西方向に開口する単室の横穴式石室である。なお、玄門部から羨道部にかけては破壊されている。奥壁は1枚、左側壁には3枚の腰石を用いており、右側壁は奥壁側で1枚残すのみである。床面の奥幅は0.65m、奥行きは1.6mを残す小石室である。石材には硅化木を多用している。

出土遺物

出土品は皆無である。

B-5号墳



第20図 B-5号墳々丘実測図(1/200)

墳丘（第20図）

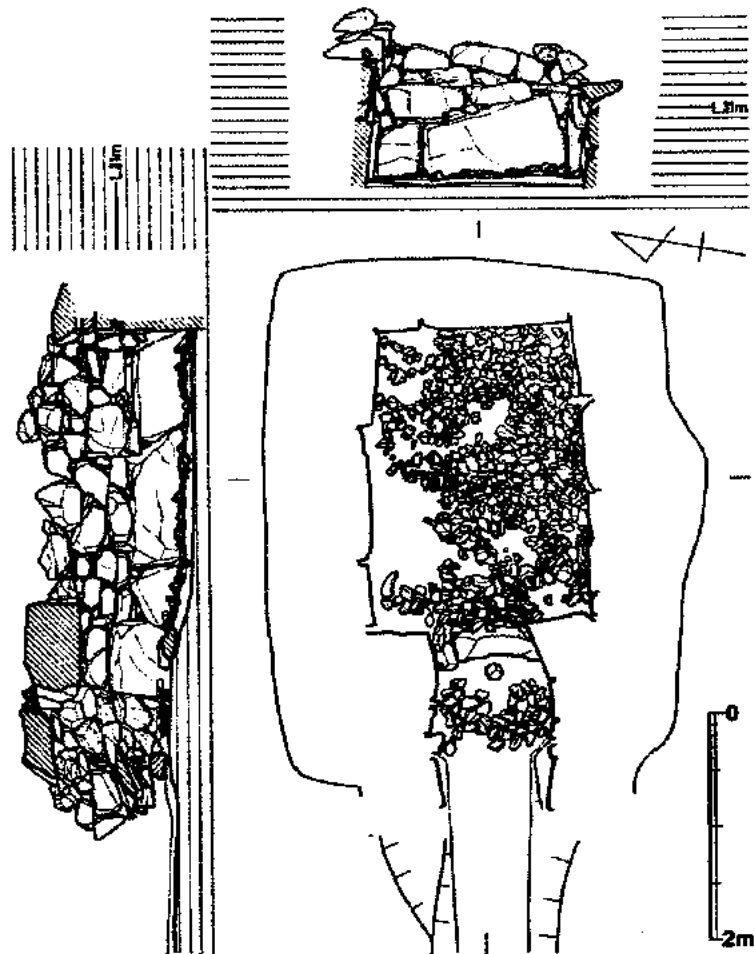
B-3号墳の乗る丘陵頂部から北西方向に一段（比高差約2m）下った丘陵鞍部北西端に占地する。

墳丘は皆滅的破壊を受けて残存しなかったが、地山の削り出しによって東西19m、南北15mの楕円形の円墳であり、尾根を切る部分では外側に周溝があく。

石室（第22図、図版7-3）

東西4.8m・南北3.5mの長方形掘り方中に築かれた、西に開口する単室の横穴式石室である。奥壁は横幅約1.3m、床面からの最高位80cmの板石と詰め石的に小板石を立てて腰石としている。西側壁は各々3枚の腰石を用いており、その頂部は床面からの高さを60cm前後にそろえ、目地を通して。その上3~4段の用材は小振りである。床面には10~15cm大の角礫を敷いている。

玄門から羨道にかけては天井石2枚が残っていた。玄門部は柱状石の上に1段積んで天井を架している。羨道部の用石は玄室のそれ



第21図 B-5号墳石室実測図（1/60）

に比べて腰石から頭大の材であり、珪化木を多用する点で玄室の石材と異にしている。なお、天井部までは床面から1.05mあり、玄門部より、25cm高くなっている。床面には玄室と同様に敷石されている。

閉塞は本来基盤石の上に板状石2枚を立てて行っていたであろうが、発掘時には内側に倒れ込んでいた。

墓道は石室主軸と平行に4.5m伸び、丘陵斜面に消えている。

出土遺物（第22～24図）

出土状況

玄室床面から僅かな須恵器と鉄器、そして土玉を主とした玉類が出土した。敷石の状況からして、玄室門左側壁下と羨道部が乱れており、追葬時及び盗掘時の破壊は考慮されるべきではあろう。

装身具（第23図）

ガラス小玉3個（1～3）は全て紺色に発色した鉛ガラスである。土玉は41個（4～8・13～48）あり、径は7.0～10.2mm、高さは5.9～11.0mmまでさまざまである。9は両頭を截した紡錘形を呈するが、中央に軽い稜をもった滑石製品で、全長1.2cm、最大幅0.6cmの玉である。

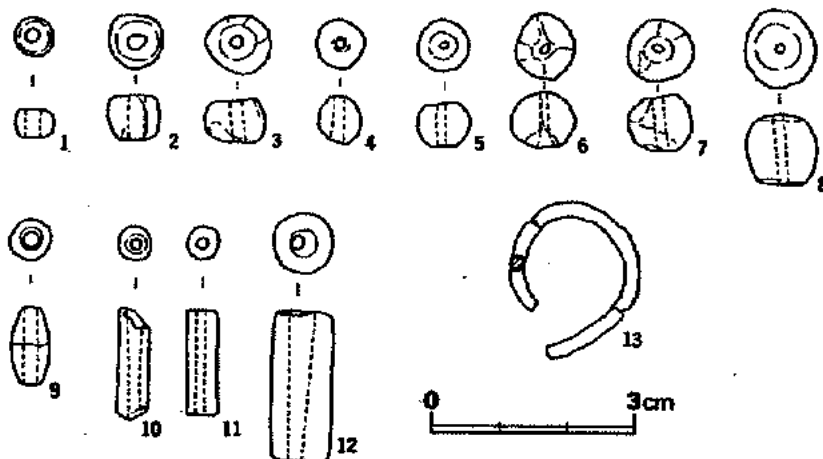
管玉（10～12）は全て碧玉製であり、小品（10・11）と大品（12）とがある。なお、小品は風化が甚しい。

武器（第23図）

鎌（1～5） 全て細根鎌である。片丸造り柳葉式（1）と片刃式（2・3）、三角形式（4・5）があるが、西丸造り三角形式のうち4は逆刺を持っている。

工具（第23図）

刀子（6） 茎部は鹿角にすっかり被われている。把の長さは6.2cm、幅2.0cmであり、茎



第22図 B-5号墳出土装身具実測図（1/1）

	器種	材質	色	径	高	図
1	小玉	ガラス	紺	5.8	4.3	1
2	"	"	"	8.6	6.7	2
3	"	"	"	8.2	6.4	3
4	丸玉	土	灰	7.1	6.8	4
5	"	"	"	8.0	6.9	5
6	"	"	"	9.5	8.3	6
7	"	"	"	9.5	8.3	7
8	"	"	明褐色	11.1	10.5	8
9	内面彫刻形玉	滑石	灰	6.0	11.5	9
10	管玉	碧玉	緑	4.6	16.6+a	10
11	"	"	白	4.6	15.2	11
12	"	"	緑	8.3	21.9	12
13	丸玉	土製	灰	9.0	8.8	-
14	"	"	"	10.2	8.6	-
15	"	"	"	9.3	7.6	-
16	"	"	"	9.3	7.5	-
17	"	"	"	9.2	5+a	-
18	"	"	"	8.1	7+a	-
19	"	"	"	7.1	6.9	-
20	"	"	"	8.2	9.4	-
21	"	"	"	9.6	7.8	-
22	"	"	"	8.6	7.0	-
23	"	"	"	8.7	6.1	-
24	"	"	"	7.7	6.8	-
25	丸玉	土製	灰	7.8	7.0	-
26	"	"	"	3.8	6.8	-
27	"	"	"	7.9	6.8	-
28	"	"	"	7.0	5.9	-
29	"	"	"	7.2	5.9	-
30	"	"	"	8.2	6.8	-
31	"	"	"	7.9	6.5	-
32	"	"	"	7.8	6.6	-
33	"	"	"	7.8	7.5	-
34	"	"	"	7.1	8.6	-
35	"	"	"	8.0	7.0	-
36	"	"	"	7.8	7.6	-
37	"	"	"	8.6	7.8	-
38	"	"	"	9.1	8.5	-
39	"	"	"	7.5	6.1	-
40	"	"	"	7.9	6.9	-
41	"	"	"	8.1	8.1	-
42	"	"	"	9.3	6.9	-
43	"	"	"	7.0	7.5	-
44	"	"	"	9.1	7.2	-
45	"	"	"	7.4	7.7	-
46	"	"	"	-	11.0	-
47	"	"	"	-	8.9	-
48	"	"	"	-	6.5+a	-

第3表 B-5号墳出土玉類計測表(単位mm)

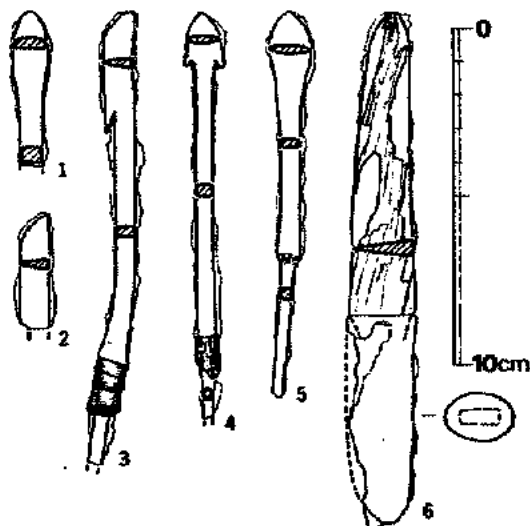
の状態は不明瞭ではあるが断面長方形を呈すると思われる。刀身の断面は膨らみをもたない二等辺三角形であり、精木質が付着している。但し精木目は刀身に対して斜行している点が注目される。

須恵器(第24図)

玄室床面から杯蓋1点が出土した。天井部は平坦で、口縁端部内側に軽い稜を有する。口径13.0cm、器高3.8cm。



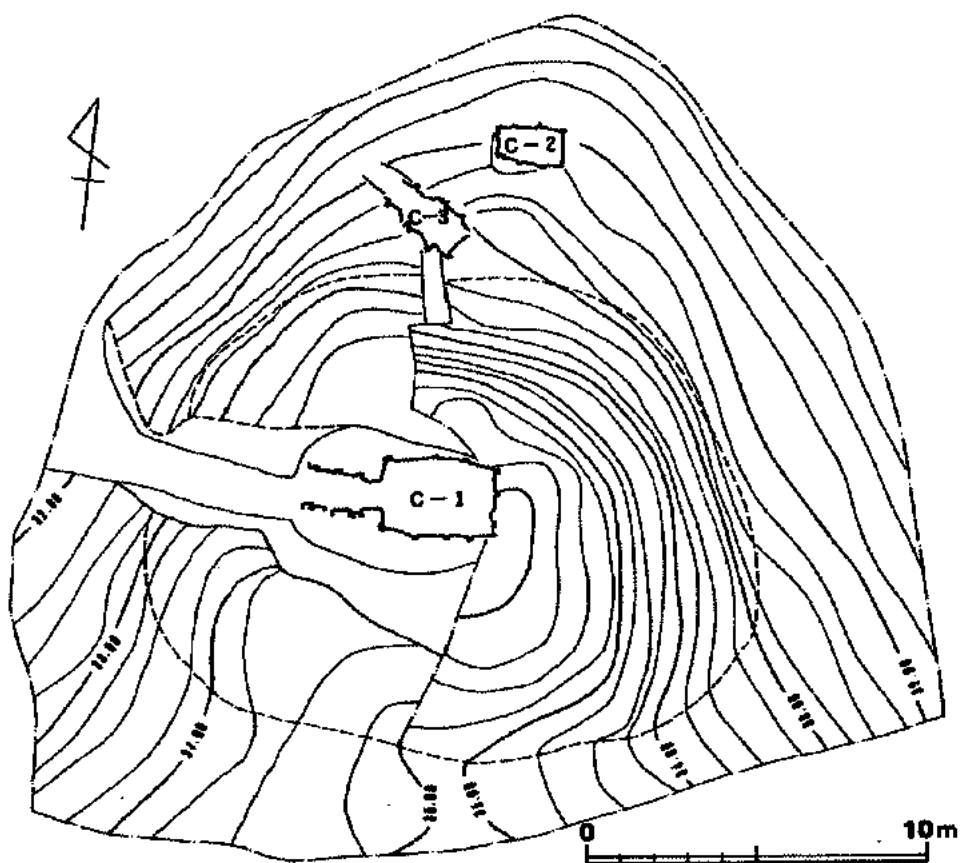
第24図 B-5号墳出土須恵器
実測図(1/3)



第23図 B-5号墳出土鉄器実測図(1/2)

3 C群の調査

B群の谷を挟んだ西側丘陵に立地する古墳群である。基本的にはC-1号墳とC-4号墳の2基より構成され、2及び3号墳が1号墳に付属する。なお、A-1号墳はその立地条件からして当群中古墳と関連付けるべきかもしれない。



第25図 C-1～3号墳々丘実測図(1/200)

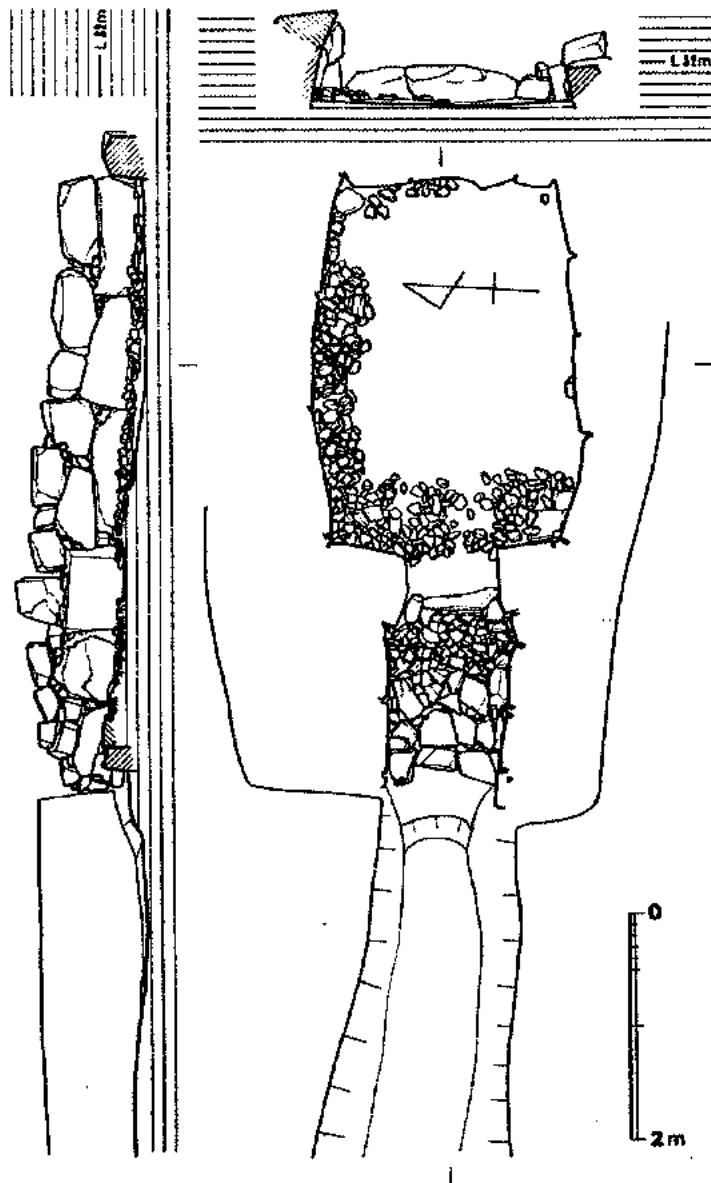
C-1号墳

墳丘（第25図）

墳丘盛土西半は調査着手前に壊滅していたが、東半は標高36.40mを最高所として残存していた。その状況から、東西18m、南北14mの円墳ではないかと想定される。なお北側墳丘裾にはC-2号及びC-3号墳が所在した。当1号墳と3号墳々丘との築造前後関係を探査するための小トレンチを設けたところ、1号墳に後れて3号墳が築かれたと確認された。なお、2号墳との関係については不明である。

石室（第26図、図版8）

南北4m、東西6.5mの長方形掘り方中に構築された、西方向に開口する単室の横穴式石室である。玄室

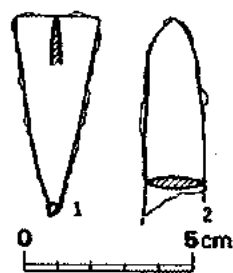


第26図 C-1号墳石室実測図（1/60）

を構成する各壁の腰石は床面からの高さ30～50cmと極めて低いのが特徴的である。両側壁は二段目の石材まで残しており、1段目及び2段目上面の目地はほぼ水平に通っている。床面には10～15cmの角礫が敷かれているが、大半は調査開始前の工事で破壊されていた。玄室の奥行きは3.3m、幅は中央がやや膨り2.3mである。

玄門及び羨道の腰石は玄室のそれよりは床面より高い。つまり玄室を構成する際は用材の長さを主とし、玄門、羨道の場合は高さを主としている。羨道の床面には奥半を玄室と同様の角礫を用いて敷き、前半は板状石を敷いて、そのまま閉塞石の基礎としている。

墓道は掘り方中央から伸び、石室中軸よりは北の谷方向へ広がっている。



第27図

C-1号墳出土鉄器
実測図(1/1)

出土遺物(第27～31、図版8・3・14・15)

石室内は壊滅的な破壊を受けていたため、鉄器が僅かに出土したにすぎない。墓道からは追葬に際して掻き出された須恵器・土師器(第28図-1～5・7・10・11・13・第29図)が出土し、墳丘裾部から若干の須恵器(第28図-6・8・9・12)が出土したが、墓道北側の墳丘下には多量の須恵器が供献されたままの状態で見出されたのは特徴的である(図版8・3)。

武器(第27図)

鉄器 広根鐵の刃部2本が出土した。1は方頭斧箭式、2は両丸造り柳葉形式で、逆刺が左側に造り出されている。

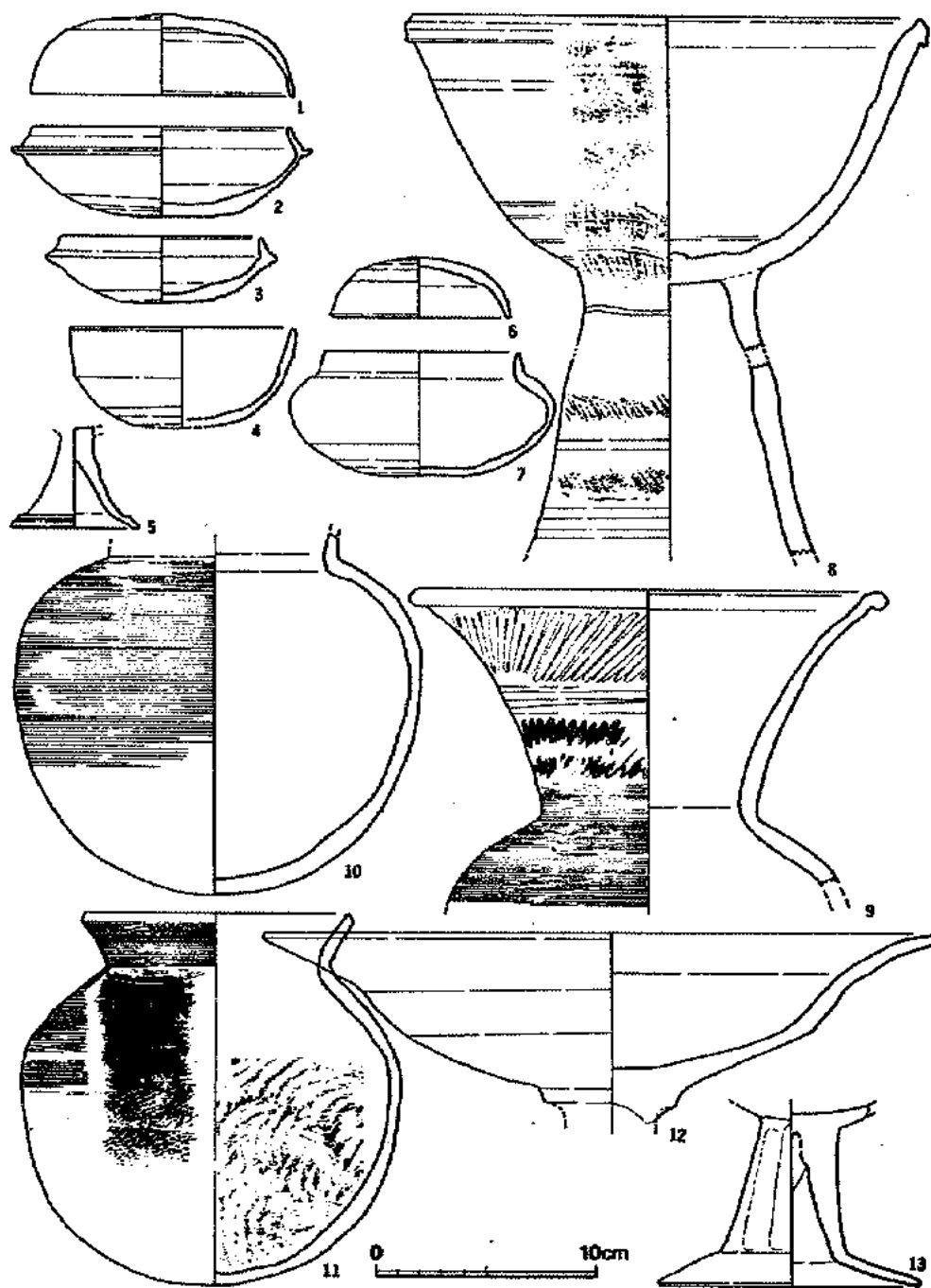
須恵器(第28図～31図、図版14・15)

第28・29図の土器は墳丘裾部及び墓道埋土中の出土品であり、第30・31図は墳丘盛土下の一括出土品である。

蓋杯(第28図-1～3、第31図-17～27) 1は口縁部が直立し、端部は丸い。天井部のヘラケズリは雄であり、胎土中に砂粒が多い。2の立ち上がりは太く、端部は丸い。3は小形の身で、立ち上がりは断面三角形で、端部は直立する。17～21の蓋は口径13.4～14.2cmあり、口縁端部内側に軽い段部や稜をもつ。天井部のヘラケズリは丁寧である。22～28の身のうち23～26・28は立ち上がりが長く、高さは1.4～1.5cmあり、直線的に内傾する。端部はどれも長い。ヘラケズリはどれも丁寧である。蓋・身共に刻まれたヘラ記号はX状であり、共通している。
碗(4) 体部中央に軽い稜をもっている。口縁部は太く丸い。底部のヘラケズリは雄で、胎土中に砂粒を多く含む点は、1の杯蓋と類似している。

高杯(5) 短脚で裾部に三角凸帯を巡らしている。

埴(6・7・31・32) 31と32はセットであり、重ね焼きしている。いずれも薄手に仕上げしており、胎土も密である。



第28图 C-1号填出土須恵器実測図①(1/3)

器台(8) 全体に硬質の焼き上りであるが、焼き歪みもしている。器内は均一で、口縁端部下に下凸帯を巡らしている。体部から脚部にかけては数条の沈線を引き、その間を櫛描波状紋あるいは刺突紋を配している。口径23.6cm。

壺(9~11・29) 短頸壺(9・10)、広口壺(11)と長頸壺(29)が含まれる。体部はいずれもカキメ調整されているが、このうち櫛描波状紋を頸部にめぐらした9は、8の器台に伴うものと思われる。

壺(30) 頸部から折り返した長い口縁部をもち、端部は丸い。球体部は底部までカキメ調整を施している。

甕(14~16・35) 14~16は中甕、35は大甕である。35は墳丘盛土下に破砕された状態で出土し、一部の破片は墓道埋土中に落下していた。中甕のうち口縁の端部下に凸帯を付したもの

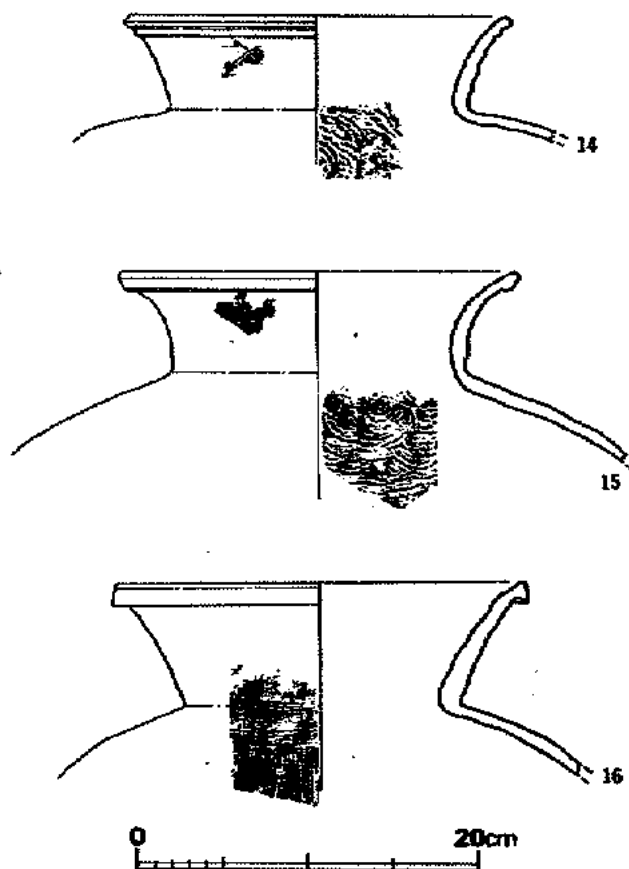
(14・15)と端部に付したもの(16)とがある。17の口縁部には凸帯を付して丸く肥厚させている。頸部には各2条よりなる沈線を3帯引き、その間を櫛描波状紋あるいは刺突文で埋めている。口径は49.8cm、最大胴部径は94.8cmである。

土師器(12・13・33・34)

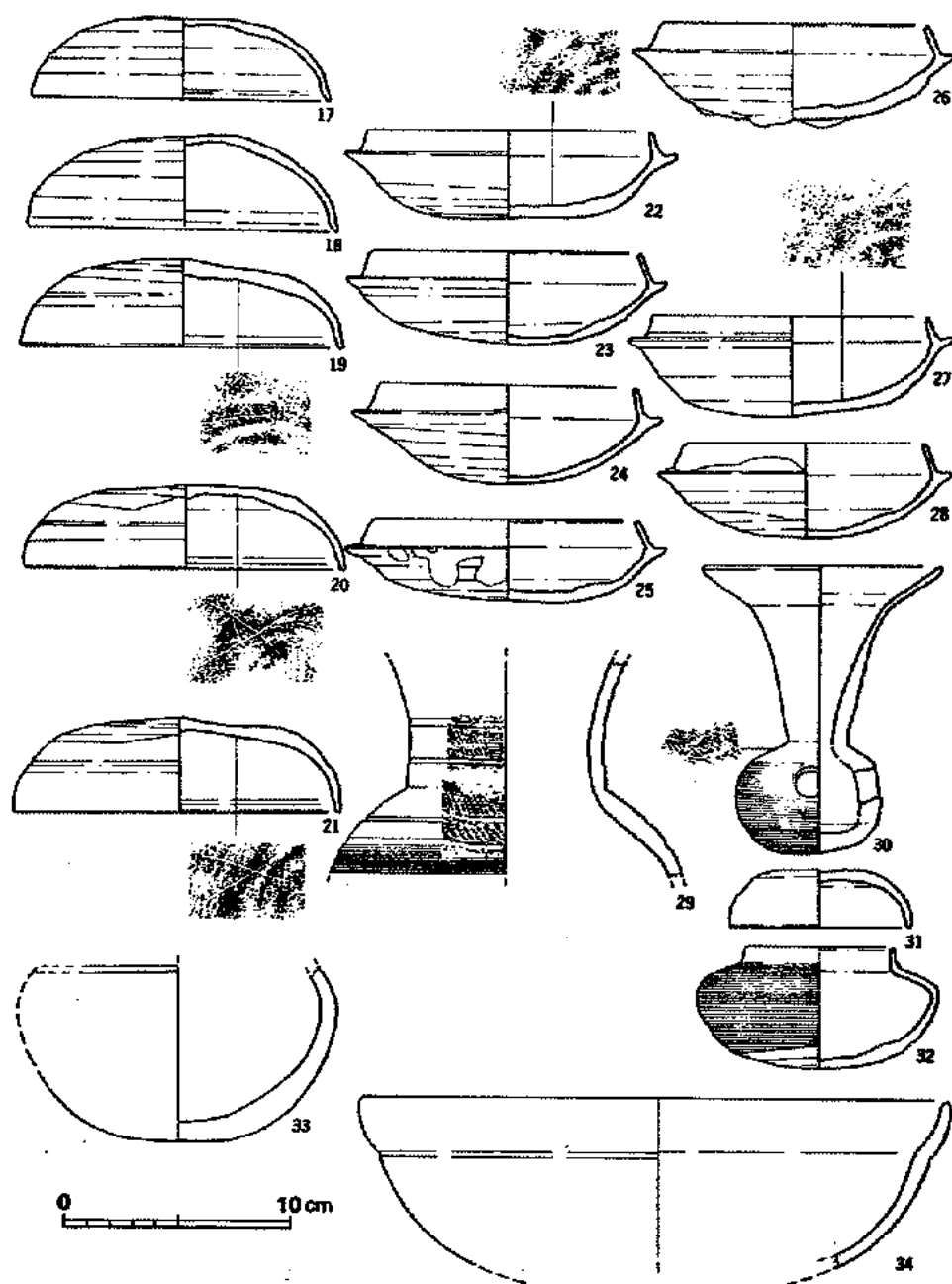
高杯(12・13) 12の杯部は体部から屈折して径31.1cmまで大きく開く口縁部をもつ。器面は剥落しているが、内外面へラ磨きのようである。13の脚部の裾を大きく広げており、端部は丸い。柱部外面はへラケズリである。

壺(33) 球形体部を持ち、頸部の屈折部に沈線を巡らしている。

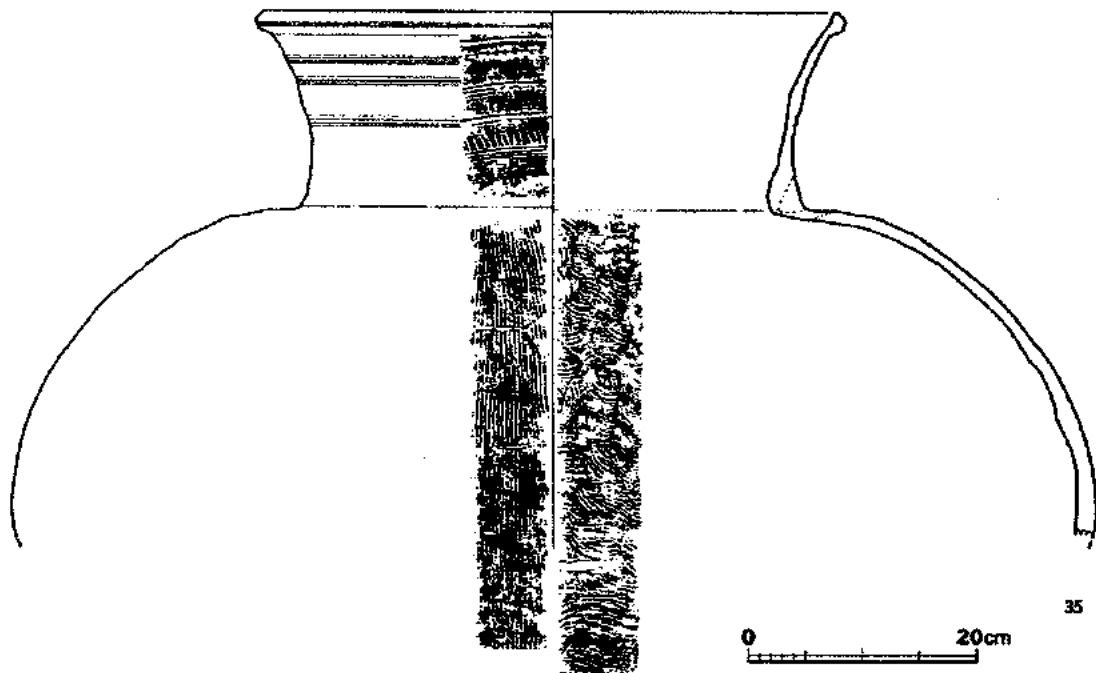
鉢(34) 体部から屈折し、直立する口縁部をもつ。口径26.1cm。全体に磨耗しているが、へラ磨き調整していると



第29図 C-1号墳出土須恵器実測図②(1/4)



第30図 C-1号墳出土須恵器実測図③ (1/3)



第31図 C-1号墳出土須恵器実測図④ (1/6)

思われる。

C-2号墳

墳丘 (第25図)

1号墳の墳丘に接して存在するが、墳丘盛土はなく、1号墳との関係は不明である。

石室 (第32図、図版9-1)

西側に開口する堅穴系の小石室である。奥壁及び側壁は直立する。石材はほとんどが珪化木を利用している。閉塞は角礫を3段積み重ねて行っているが、側壁石材がその上に乗っており、石室構築と閉塞作業が同時に行われたと推察される。奥行き98cm、奥幅50cm、前幅40cmである。

出土遺物

皆無である。

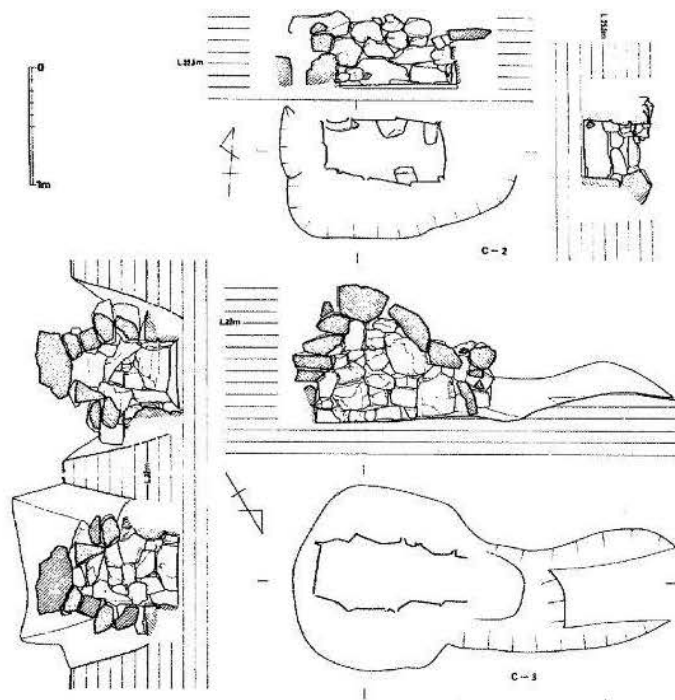
C-3号墳

墳丘 (第25図)

C-1号墳々丘上に築かれているが、その規模は不明である。

石室 (第32図、図版9-2・3)

径1.5mの円形の掘り方中に築かれた、北西に開口する単室の小型横穴式石室である。小規



第32图 C-2·3号基石基脚图 (1/30)

横ながら玄室・玄門・羨道を明瞭に築き上げており、竈道も完備している。玄室は奥行き65cm、幅55cm、天井までの高さ84cmである。羨道は高さ42cm、幅37cmで、遺体の入れ込みにはかなり不便であったと思われる。閉塞は板石を立て、天井との間に詰め石をしていた。石材には珪化木を多用していた。

出土遺物

皆無である。

C-4号墳

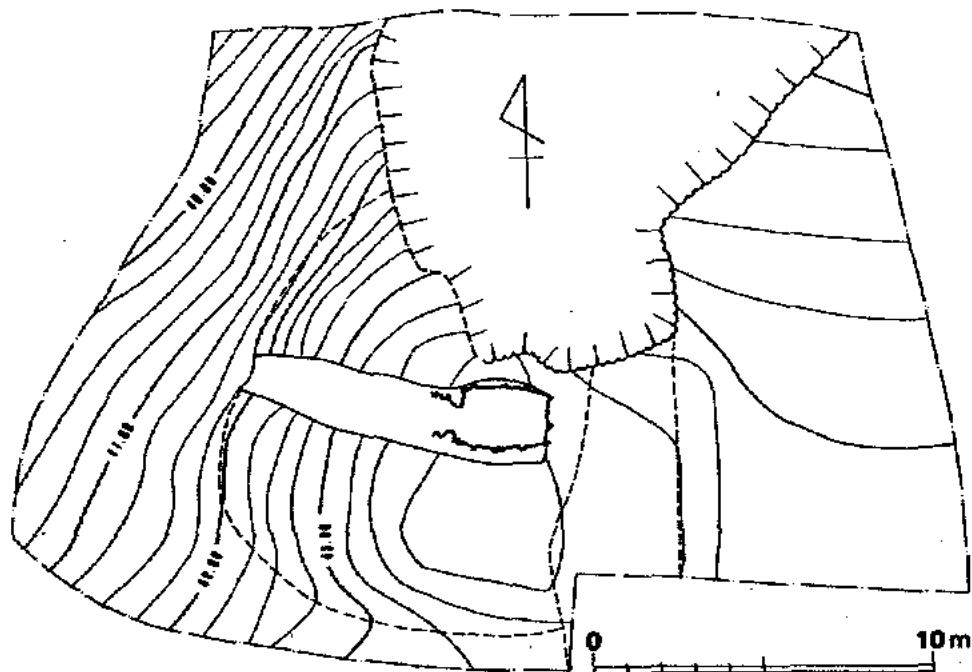
墳丘（第32図、図版10-1）

墳丘は東半が全て削られ、特に北側は崖によって大きく抉られていたが、西半には標高43.89mを最高所とする墳丘が残されていた。径13m前後の円墳と考えられ、尾根が高まる南側には外側に周溝がめぐる。

石室（第34図、図版10-2）

南北2.2m、東西3.5mの長方形掘り方中に構かれた、西に開口する単室の横穴式石室である。

玄室は奥壁には大振りの鏡石を立てているが、側壁の腰石は床面から30cm程と、いつも低



第33図 C-4号墳々丘実測図（1/200）

い。奥壁は直立し、1.4 mの高さ残していた。側壁は腰石上から持ち送りしている。側壁が中膨らみする床面上には敷石が散乱している。玄門から羨道にかけての側壁は八字状に短かく開く。天井部までの高さは87cmである。

羨道部は板状石を立て、天井との間に詰め石することによって閉塞している。

墓道は石室主軸より谷側に振ってから5.1 m伸びるが、床面のレベルは玄室及び羨道床面が水平である。

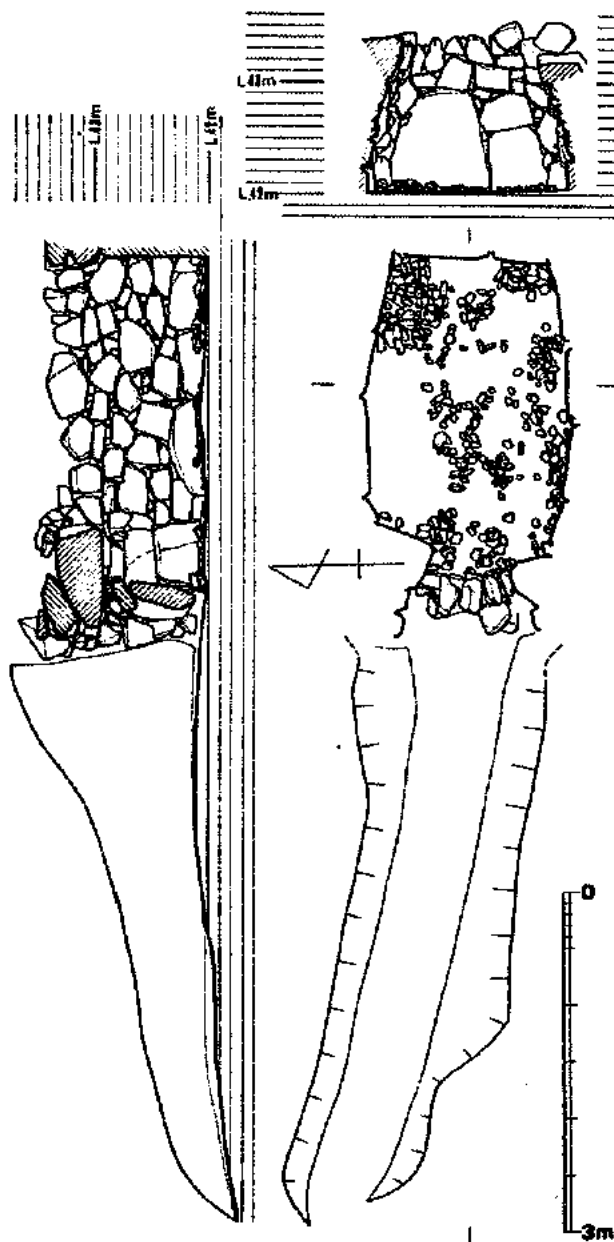
出土遺物（第35・36図、図版16）

出土状況

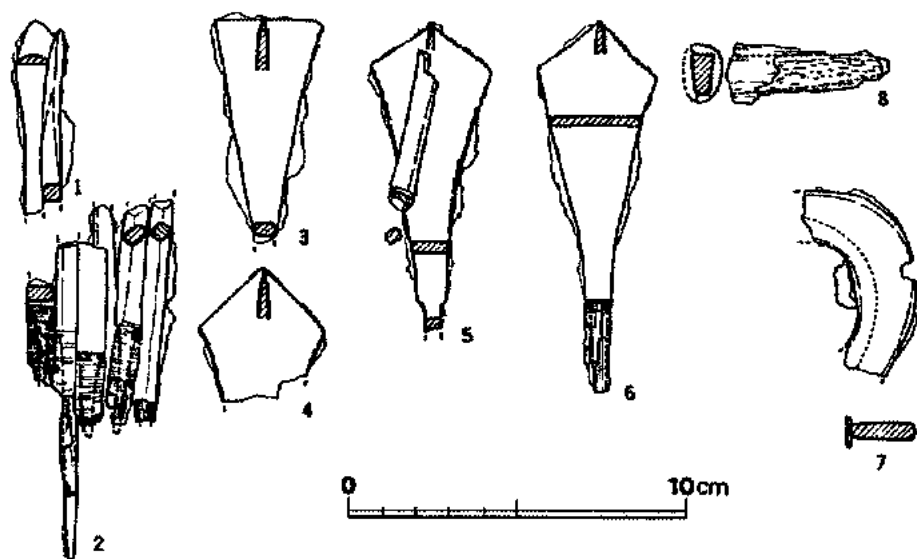
石室からは鉄器が若干したにすぎないが、南側の周溝中と墳丘盛土中から須恵器がややまとまって出土した。特に第36図-10~12の小型提瓶は一括出土品である。

武器（第35図）

鉄鏃（1~6） 細根鏃（1・2）は密着して出土した。片丸造りの柳葉式である。広根鏃には方頭斧箭式（3）と定角式（4~6）とが含まれる。
 鏑（7） 鉄製である。鏑内には把木質が一部付着し、鏑周囲には鏑元金具の着痕がみ



第34図 C-4号墳石室実測図（1/60）



第35図 C-4号墳出土鉄器実測図(1/2)

られる。厚さ約5mmである。

工具(8)

刀子 茎のみが出土した。把は鹿角である。関節近くで、茎の幅12mm、背部厚0.6cm、把の幅1.8cm、復元厚1.1cm。

須恵器(第36図)

蓋杯(1~6) 1・2の蓋と5・6の身は墓道埋土中から出土した。胎土・色調・焼成度は類似しており互いに對をなすものであろう。口径は蓋の1で10.8cm、身の5で8.3cmであり、身の立ち上りも低い。3・4の蓋は周溝中の出土品である。4は口縁部が直立し、端部内面に軽い段部をもつ。口径13.3cm。

高杯(7) 杯部は底部から僅かに直立してのち、直線的に外傾する口縁部へとなる。杯底部から脚柱部にかけてはカキメ調整している。裾端部は僅かに肥厚する。

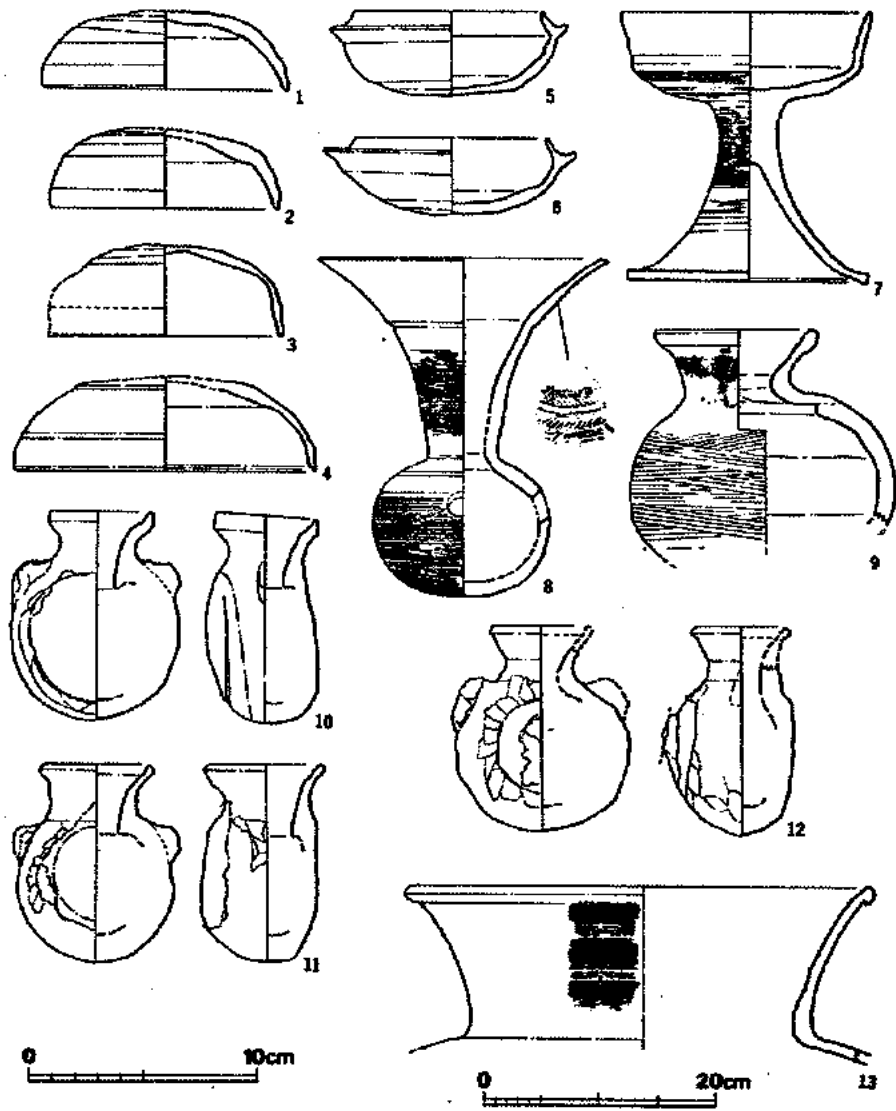
壺(8) 頸部から残をもって大きく開く口縁部は長く、端部は平坦である。球体部の孔部は欠失する。肩部には沈線1条をはさんで櫛刺突紋2帯が巡っている。

平版(9) 口縁部を肥厚させ、端部は丸い。体部に粗いカキメを施している。

提瓶(10~12) 口縁部の内外面のみはヨコナデ調整しているが、体部はナデ調整あるいは手持ちのヘラケズリである。球形面には壁の剝離面があり、ケズリ痕がその面で跡切れる事から、これらの小提瓶は例えば小持ち壺や盥台の「小」として付されていたと考えられる。このこと

は12の球面に付着する別体の壁のカーブが球面と反対に曲ることも理解される。器高は11が9.7cm、12が9.1cmで、10はその中間である。焼成は軟質である。

甕 (13) 口径39.8cmの口端部である。口縁外面に偏平凸帯を付している。頸部には櫛描き波状紋を広く巡らせ、その間を2段にわたってヨコナデし、波状紋を消している。



第36図 C-4号墳出土須恵器実測図 (1/3)

4 D群の調査

調査区内西部の丘陵頂部に2基の古墳がそれぞれ独立して占地する。その間の距離は約50mであり、南東側の2号墳が標高50.4mと高位にある。

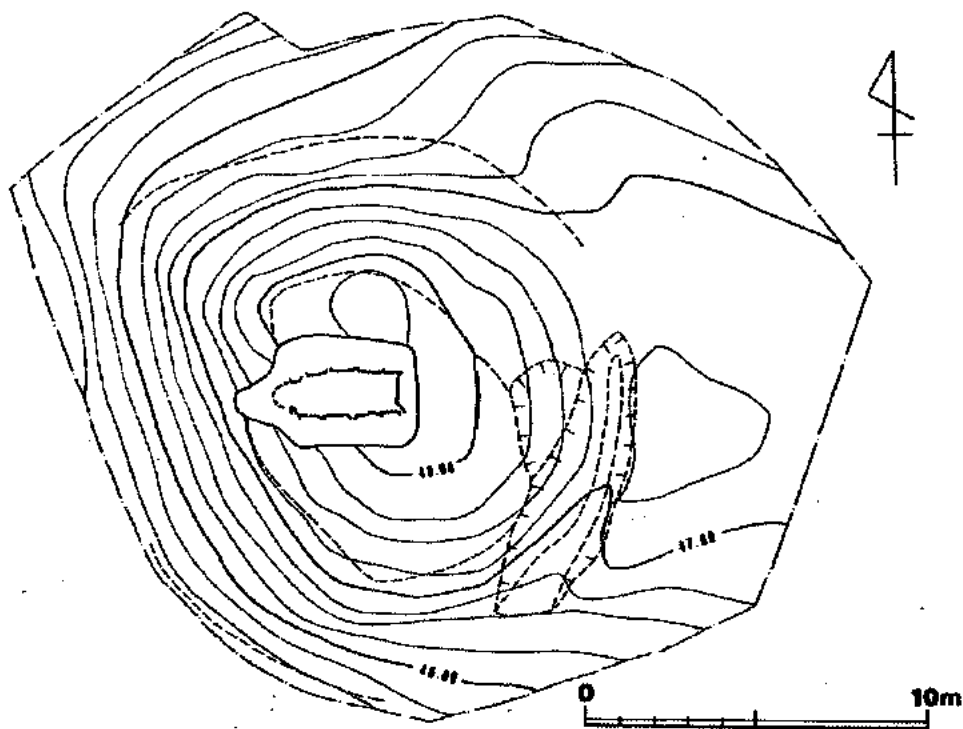
D-1号墳

墳丘（第37図、図版12-1）

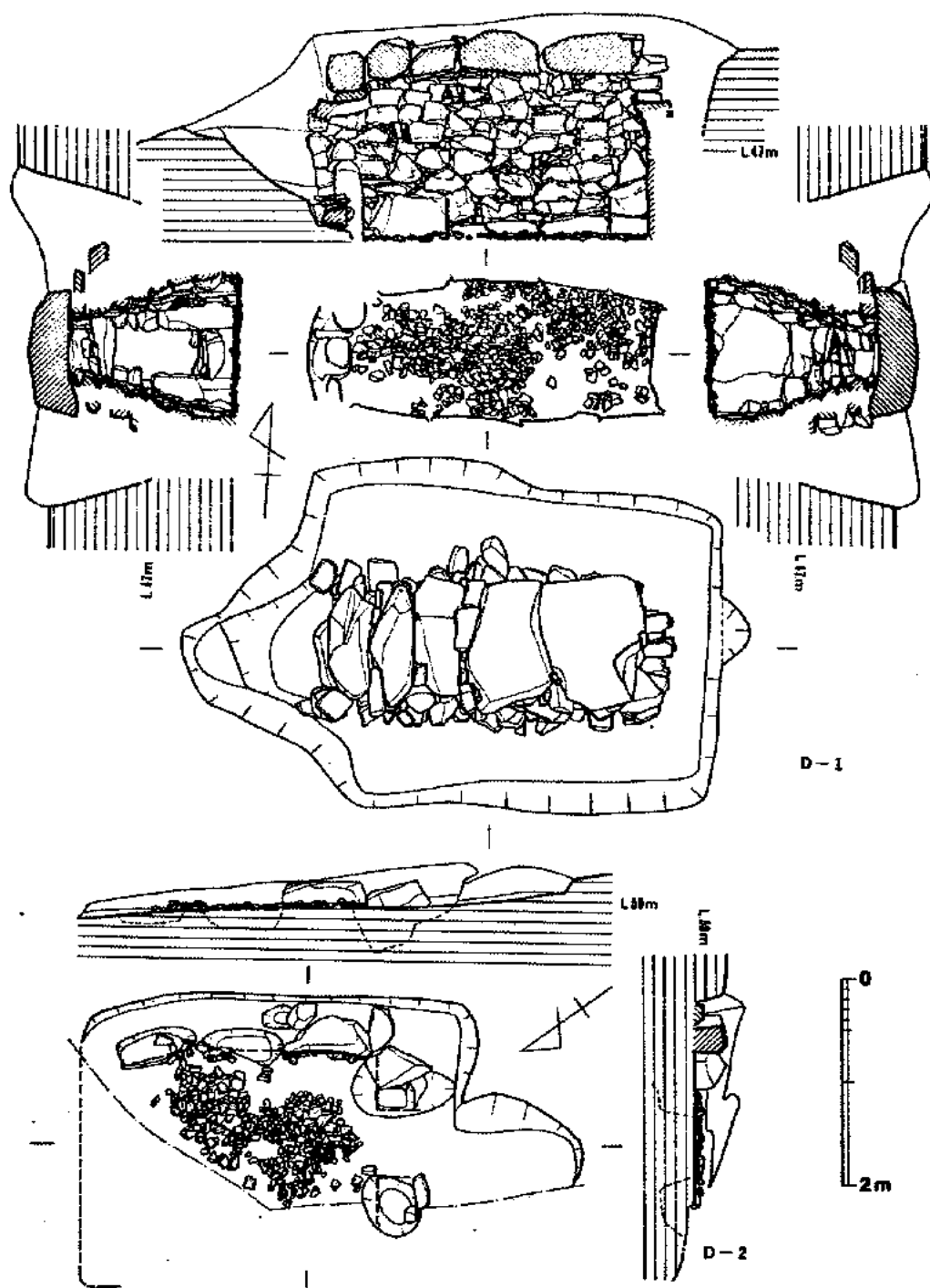
当古墳群中で完存していた唯一の古墳である。径15～16mの円墳であり、東側尾根筋の墳丘外側に丘尾切断溝が約9m巡っている。

石室（第38図、図版11・12）

南北4.1m、東西3.3mの長方形掘り方中に築かれた、狭長な横口式石室で、西方向に開口する。玄室奥壁は直立し、腰石には1枚の鏡石を用いている。側壁は横積みした腰石を左右各4枚で築かれ、その上に中小角礫を積んでいる。持ち送りは腰石より直接内傾させている。天井は4枚架構され、その下面は水平で、床面からの高さは1.65mである。床には4～10cm大の



第37図 D-1号墳々丘実測図（1/200）



第38图 D-1·2号填石室实测图 (1/60)

角礫が敷かれている。玄門には狭長な柱状石を用いている。この間の天井までの高さは1.45mと玄室より20cm低くなっている。またこの間の床は一段高まり、その上に閉塞石を置いている。閉塞は用材を2段積みし、その上に板状石を立てている。この板状石と天井や側壁との空間には詰め石している。玄門外側の掘り方壁との間には1列の小石材を積み上げている（図版11）。

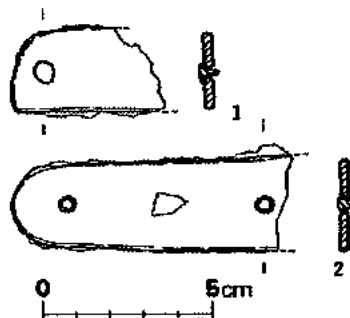
出土遺物（第39・40図、図版16）

出土状況

石室内からは馬具片が僅かに出土したのみであり、周溝中からは須恵器片が出土した。

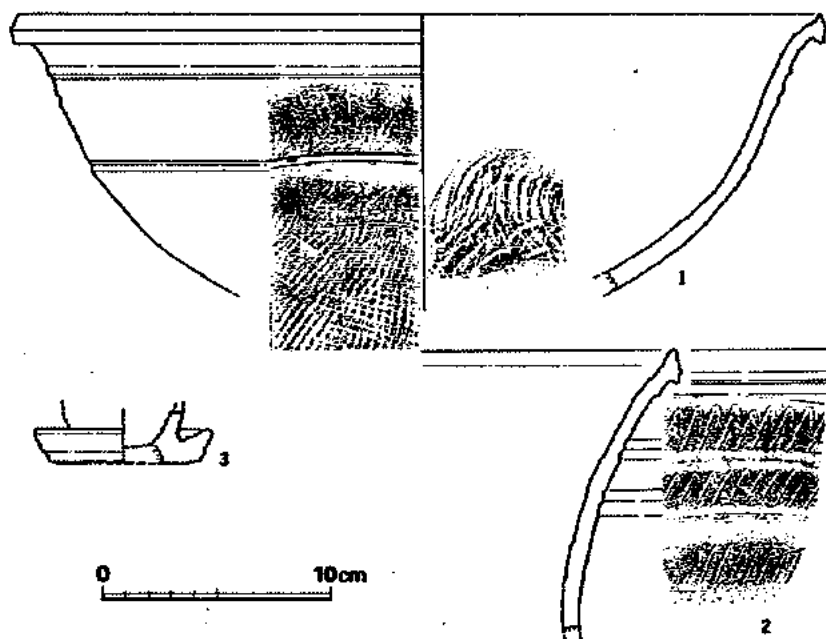
馬具（第39図）

鉄留金具 鉄地金銅貼りであり、1には2個所の鉄が認められ、さらにその中間破損部にも鉄打ちされていたかとも思われる。1の鉄は1個所のみである。1は幅2.8cm、厚さ0.3cmである。2は幅2.5cm、厚さ0.3cmである。



第39図 D-1号墳出土鉄器
実測図（1／2）

須恵器（第40図）



第40図 D-1号墳出土須恵器実測図（1／3）

器台(1) 口縁部下端に三角凸帯を貼付し、上下両端を鋭くヨコナデ調整している。口縁部に細い一条の凸帯を巡らし、体部は縦横波状紋を2段引く。体部下半から底部にかけて、外面は平行叩きの上を部分的にカキメ調整し、内面には青海波が残っている。口径35.2cm。

甕(2) 口頸部の小破片であるが、口縁端部の形状や外面調整は1の器台と同様である。

不明須恵器(3) 浅い皿状容器の内面から、さらに直立する部分をもった二重容器である。底面は未調整で、焼成は軟質である。外器口径7.6cm。

D-2号墳

墳丘(第41図)

調査の工事で壊滅的破壊を受け、墳丘規模を推測することさえ不可能である。

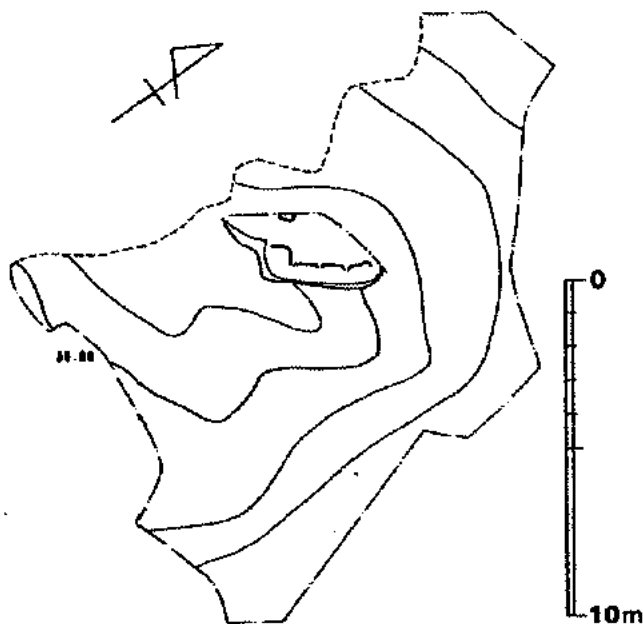
石室(第38図、図版12-2)

南西方向に開口する横口式石室であるが、側壁腰石1を残すのみである。石材組み方から推測すれば、玄室の奥行きは約2.4m、幅は約1.7m前後かと思われる。玄室には5~10cm大の角礫が敷かれている。玄門幅は0.7m前後と思われる。床面レベルは短かい墓道端か

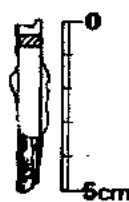
ら玄室奥壁に向って直線的に下向している。

出土遺物

鉄鏃(第43図) 床面から出土した唯一の遺物であり、茎には矢柄材質が付している。



第41図 D-2号墳々丘実測図(1/200)



第42図
D-2号墳
出土鉄器実測図
(1/2)

IV お わ り に

数支の丘陵尾根上には350m間隔で散在する古墳群である。B4-C2、C3号の各々小石室を主体部とする古墳はB3号あるいはC1号墳に付随する。なお、A1号とB1号墳の間にさらに1基存在した可能性は充分考えられる。

墳丘の状況はいつれの古墳も壊滅的破壊を受けて不明であるが、宗像郡の通例として掘り方が深いため、破壊の激しさの割には比較的良く石室が残っていた。石室はB1号が複室の横穴式石室、D1号が堅穴系横口式石室であった以外は全て単室の横穴式石室であった。なお、D2号は横口式石室であった可能性もある。

D1号の石室平面プランは狭長である。奥壁は直立し、側面観が直方形をなす。宗像地方で通有の堅穴系横口式石室であり、6世紀前半に比定されよう。

A1・B2・B3・B5・C1・C4号の単室横穴式石室の玄室平面プランは方形に近い長方形で、側壁が中膨らみする例も多い。C1号墳々丘下からは墓道脇で一括埋納された須恵器群が発見されたが、これらは6世紀後半のものである。他の単室横穴式石室を主体部とする古墳もほぼその時期に築造されたものであろう。

複室の横穴式石室をもつB1号墳は調査区中最高位に位置する。玄室の大半が破壊されており、出土遺物も貧弱であったが、6世紀末に築造され、7世紀中葉まで追葬されたと考えられる。

丘陵尾根上に半独立的に散在する古墳群であったが、時代的変遷をたどることができ、興味深い。周辺古墳群の調査が現在宗像市教育委員会の手によって実施されており、その結果を待つて群構造の解明がなされるものと期待される。

	石室 全長	玄室長		羨道長		玄室巾		羨 道 巾	出土遺物						備 考
		右	左	右	左	奥	前		須恵器	土師器	装身具	武器	馬具	工具	
A 1	4.4±	3.5±	不明	0.9	1.0	不明	不明	1.3	—	—	—	—	—	—	大規模な破壊を受けている
B 1	4.9+α	2.0+α	1.4+α	2.9	2.9	不明	1.85	1.1	器台・甕 蓋杯・壺・高杯	高杯	—	鏃	—	刀子	
2	3.7	3.0±	3.0±	不明	不明	2.0±	2.0±	0.8±	蓋杯・甕	—	玉耳環	刀・鏃	—	刀子	
3	3.0	2.6	2.5	0.6	0.4	1.5	1.4	0.6	—	—	玉耳環	鏃・刀	兵用銅 鏡板・銜	刀子	玄室中央幅は1.7
4	1.7+α	不明	1.6+α	不明	不明	0.6	不明	不明	—	—	—	—	—	—	玄室中央幅正がる
5	4.3	2.6	2.7	1.7	1.6	1.7	1.9	1.0	蓋杯	—	玉	鏃	—	刀子	
C 1	5.6	3.1	3.2	2.4	2.1	1.9	2.0	1.1	埴・器台 蓋杯・甕・高杯	壺・鉢	—	鏃	—	—	玄室中央幅は2.3
2	2.5	2.0	1.9	不明	不明	1.0	0.8	不明	—	—	—	—	—	—	
3	2.4	1.6	1.4	0.8	1.2	0.9	1.1	0.7	—	—	—	—	—	—	
4	3.3	2.6	2.4	0.7	1.0	1.3	1.5	奥 0.6 前 1.2	蓋杯・高杯・地 平・壺			刀・鏃	—	刀子	玄室中央幅は1.8
D 1	3.2	3.0	2.8	0.2	0.3	1.1	1.1		器台・甕				留金具		玄室中央幅は1.3
2	2.8±	2.5±	2.5±	0.5±	0.5±	1.8±	1.8±	0.7±				鏃	—		

第4表 石室計測表

圖 版



華田古墳群遺跡出土品

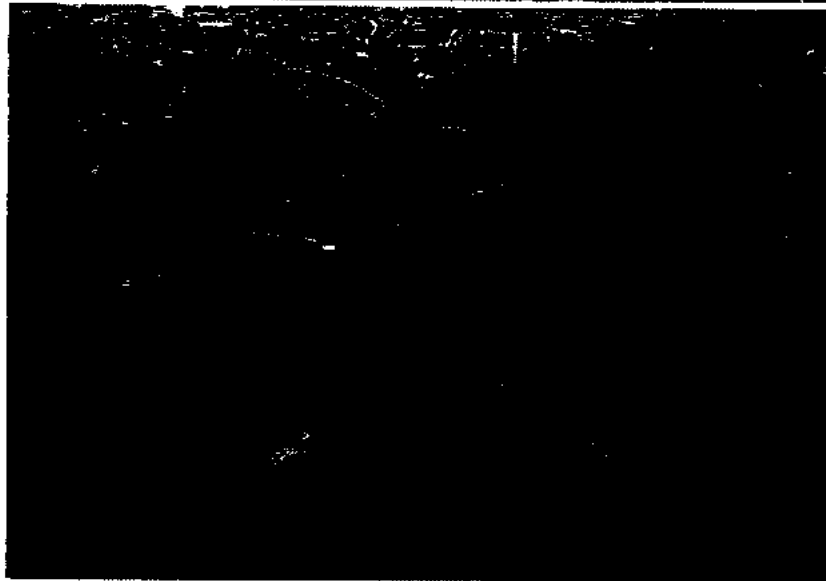
(1) 航空写真
(南東より)

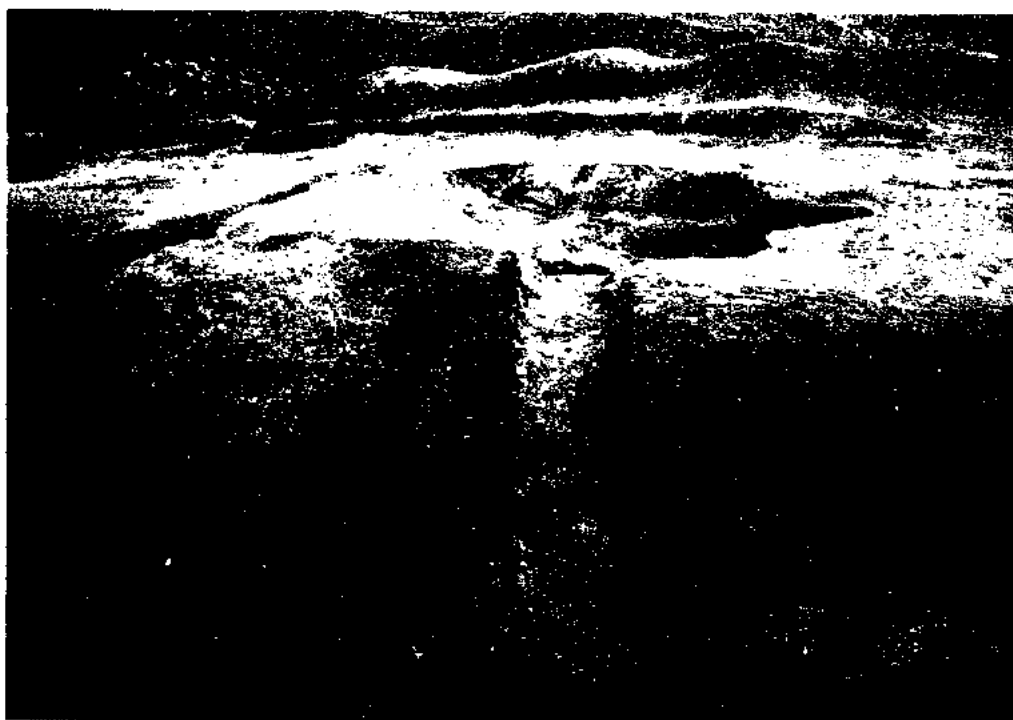


(2) 航空写真
(西より)

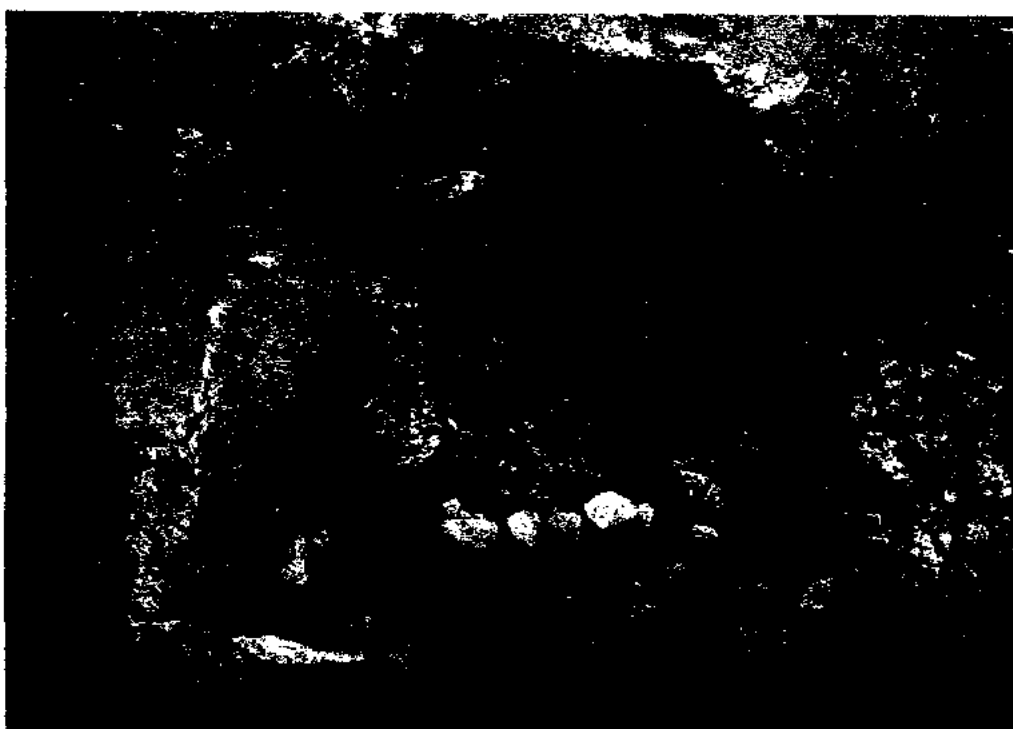


(3) 航空写真
(北より)

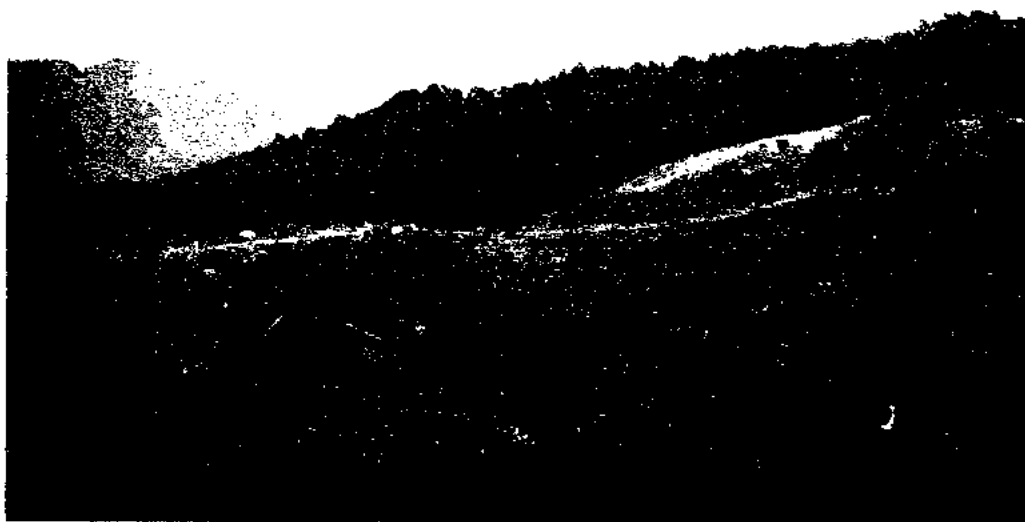




(1) A-1 号墳全貌



(2) A-1 号墳石室



(1) B群 (西より)



(2) B群 (南より)



(1) B-1 号墳
(発掘前)



(2) B-1 号墳全景



(3) B-1 号墳石室



(1) B-2 号墳全景



(2) B-2 号墳玄室床面鉄刀出土状況



(1) B-3 号墳全景



(2) B-4 号墳全景



(3) B-5 号墳全景

(1) C-1 号墳全景



(2) C-1 号墳
石室全景



(3) C-1 号墳々丘
内遺物出土状況





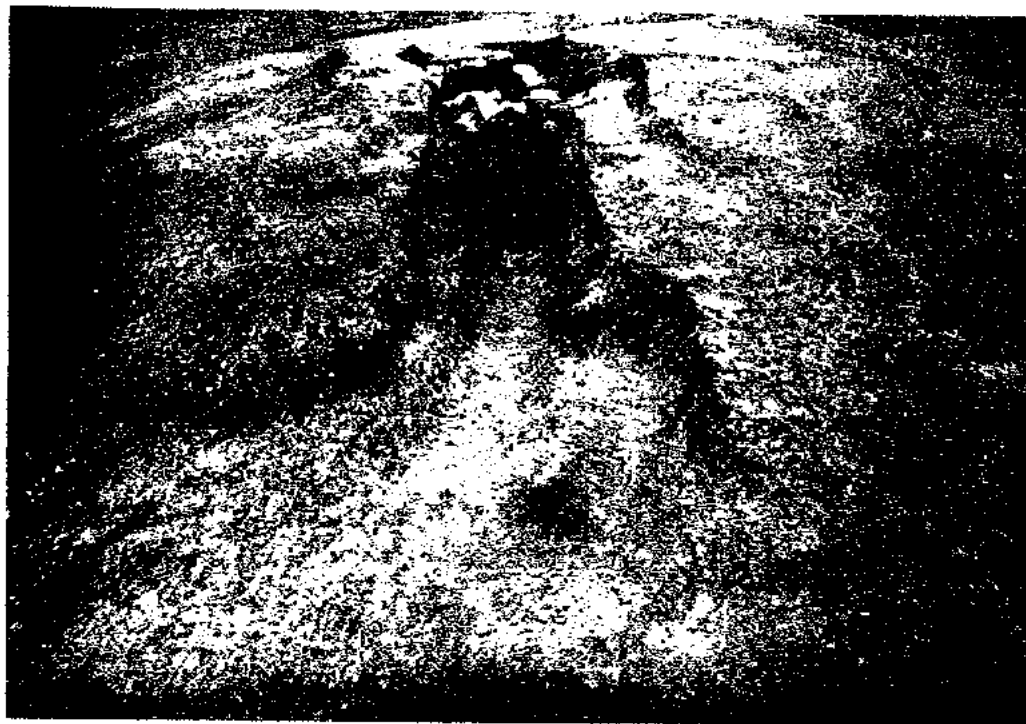
(1) C-2号墳
石室全景



(2) C-3号墳
石室全景



(3) C-3号墳
石室全景
(天井石除去後)



(1) C-4号墳全景



(2) C-4号墳石室全景



(1) D-1号墳玄門部閉塞状況



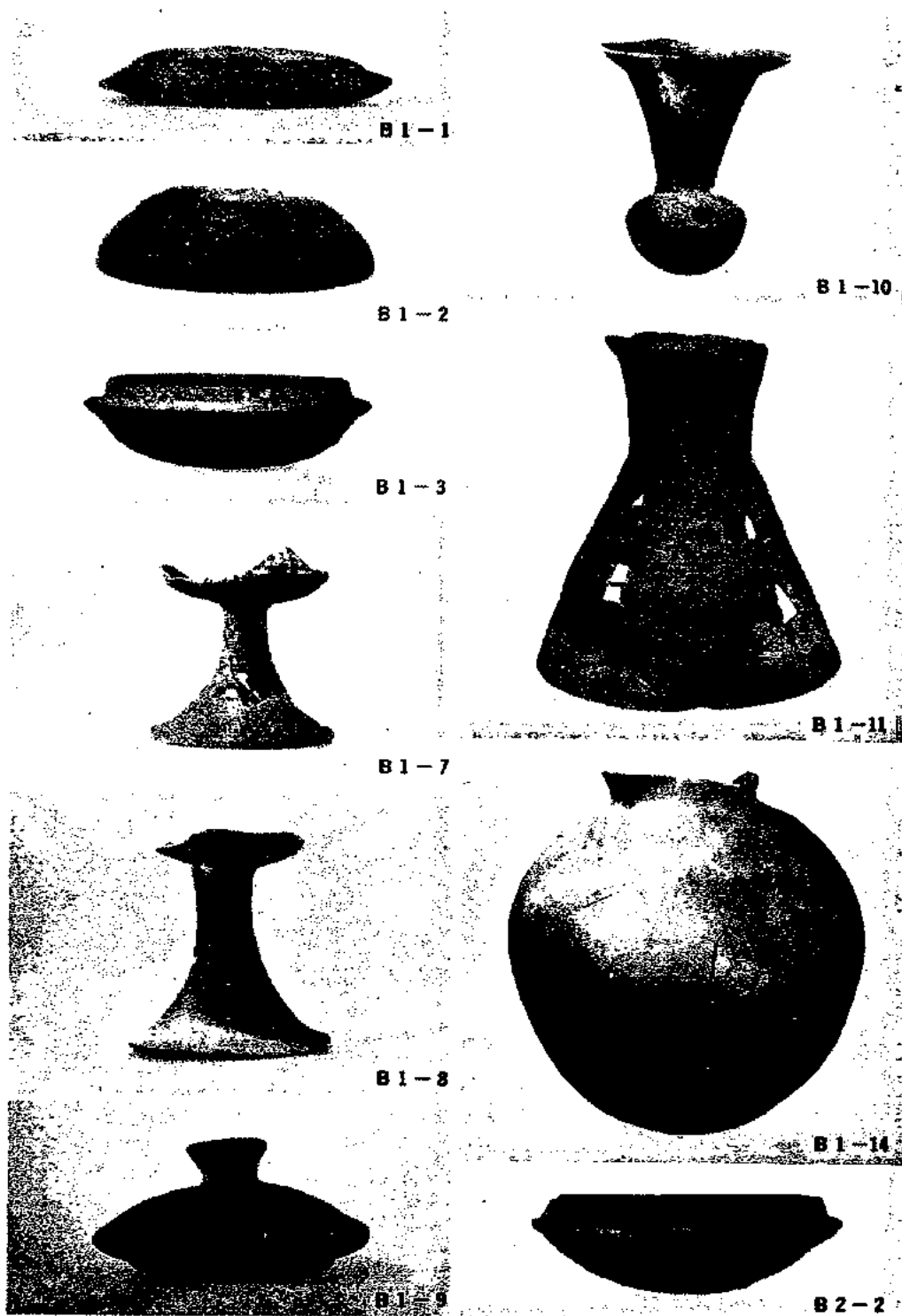
(2) D-1号墳玄門部（閉塞石除去後）



(1) D-1 号墳全景



(2) D-2 号墳全景



B1・2号墳出土須恵器



C1-1



C1-12



C1-2



C1-5



C1-13



C1-8



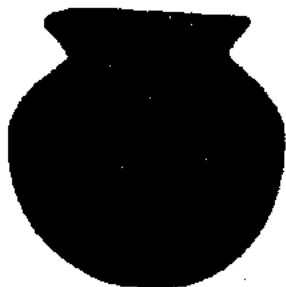
C1-14



C1-10



C1-15



C1-11



C1-16

C-1号墳出土須恵器・土師器①



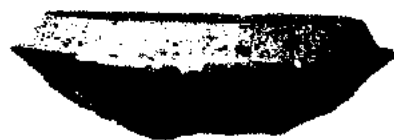
17



25



18



26



19



27



20



30



21



31



22



32



23



24



34

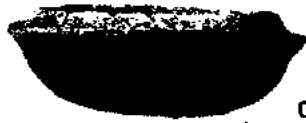
C-1 号坑出土须惠器・土師器②



C4-1



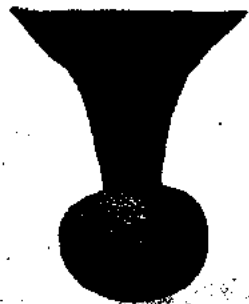
C4-2



C4-6



C4-7



C4-8



C4-9



C4-10



C4-11



C4-12



D1-1



C4·D1号墳出土須恵器

半田古墳群

宗像市文化財調査報告書 第6集

1983年3月31日

発行 宗像市教育委員会

福岡県宗像市大字東郷995番地

印刷 釜瀬印刷

福岡県宗像市稲元